翻訳

民族の解放

カール・カウツキー著
丸山敬一訳

訳者はしがき

カール・カウツキーは、一九一七年に「民族の解放」と題する論文を『ノイエ・ツァイト』三五巻二号に連載し、その中でオットー・バウアーを重ねて批判した。それは、一四五―一五三、一七七―一八九、一九三―二〇〇、二二八―二三四、二四一―二四九、二七三―二八一ページに分載されていたが、翌年一冊のパンフレットになって出版された（Die Befreiung der Nationen. Stuttgart. 1918）。ここでは、このパンフレットを底本として訳出した。

本誌三四巻一・二合併号と三・四合併号に載せた二つの論文（カール・カウツキー「民族性と国際性」、オットー・バウアー「民族問題評注」）と本年（二〇〇一年）中に御茶の水書房から出版予定のバウアーの大著『民族問題と社会民主主義』およびそこに収録されている「第二版への序文」とを併わせて読めば、民族問題をめぐるバウアーとカウツキーの論争をほぼ概観する

ことができる。そして、これらの論文は今日の民族問題を考える上でさまざまの示唆を与えてくれるであろう。

民族の解放

序言

戦争目的に関する討論は、国際社会民主主義という私の立場から見て当然目指さなければならない講和条件についての包括的な叙述と理論的な根拠付けを練り上げることを私に強いた。

この論文の最初の部分を、私はここで読者の前に提出する。この論文が完成するまで出版を待つことは、得策でないように私には思われた。予測しがたきものが、社会生活において今日ほど大きな役割を演じている時代はかってなかった。続く部分を書き上げ、出版することには、克服不可能な、私には予見することのできない困難が横たわっているかもしれない。

ここに提出された最初の部分は、それ自体で完結している。そこでは、我々が民族問題を考慮する際の基本的な諸論点が論じられている。

この論文の第二の部分では、今日討論の全面に立っている一定の具体的事例――セルビア、ベルギー、エルザス、ベーメン等々――にこの原理を適用することが試みられるであろう。

最後に、第三の部分では帝国主義と軍備拡張競争に反対する闘争が必要とする諸要求が論じられるはずである。

私はこれら二つの部分を出来るだけ早く完成するよう努力するであろう。だが、協調による平和、共存共栄という原則に基づく平和が実現し、このパンフレットの続編で論ずべき対象がなくなり、パンフレットそのものが余分なものになるという状況が急速にやってくることほど私を喜ばせることはないであろう。

ベルリン　六月初め

ストックホルムへの旅立ちの前に

一、民族自決

社会民主党は国際主義的にして、民主主義的な政党である。社会民主党が半世紀以上にわたって、この精神で活動してきた後では、このことは自ずから理解されるであろう。だが、今やこのことをはっきりと確認することが必要となった。なぜなら、この戦争の過程で、社会民主党自体の中に、民族自決の要求は空虚なたわごとにすぎないという声が高くなっているからである。だが、民主主義を求める闘争は、民族の自決を求める闘争とどこが異なっているのであろうか。また、国際主義的な民主主義は、自決が自分の所属している民族に対してだけでなく、すべての民族に対して同程度に要求されるという方法以外の他のいかなる方法によって可能であろうか。

急進主義者の側から、民族自決は資本主義的生産様式の内部では実現されず、ただ社会主義社会においてのみ意味をもつと

いう異議が唱えられている。だが、実際には事実はむしろ次のようであろう。つまり、社会主義社会では自決の要求は、すでに実現されているがゆえに余分なものとなるであろう。プロレタリア社会主義は、初めから民主主義的社会主義であり、民主主義は、その上に社会主義が構築されるべき基礎である。社会主義社会がすでに立脚している基礎が、今や初めて作り出されるべきであると社会主義社会の中で要求することはナンセンスなことである。

それに対して、民主主義、すなわち民族自決権は、資本主義的生産様式の内部において真の民主主義が貫徹することが少なければ少ないほど、それだけますます強く要求され、そのための闘争がそれだけ精力的に遂行されなければならない。民主主義を求めるプロレタリアートの闘争は、国家権力や政治権力を求めるプロレタリアートの闘争と同じ意味をもっている。資本主義的生産様式の内部での民族自決権のための闘争を見込みのないものと宣言することは、政治権力のための彼らの闘争を見込みのないものと宣言することと同じであり、資本主義転覆のための梃子としての国家権力の獲得を断念することと同じであり、プロレタリアートの勝利のための闘争において、自ら進んで純粋に経済的で非政治的な手段に限定しようとすることと同じである。

このような考え方が、今までアナーキズムを社会民主主義から分けてきた。急進的な側面から、民族自決の要求を拒否する人は、たとえ無意識のうちにであれ、あるいは意に反してであれ、アナーキズムの基盤の上に移ることになる。我々はここでアナーキズムと対決する必要はない。アナーキズムについて言うべきことは、我々の以前の党文献の中に十分見い出される。この分野で新しい思想傾向が登場してきたわけではない。

他の側面から民族自決の要求を拒否するのは、社会民主党の中の帝国主義者たちである。自然権、それゆえまた民族自決権などというものは、マルクス主義的見地からは存在しないという理由で。それは正しい。だが、それはこの権利を自然法的に根拠付けようとする時にのみ妥当するのであって、要求それ自体には妥当しない。マルクス主義の立場から見れば、この要求はプロレタリアートの生活条件や闘争条件から生み出されてくるものである。プロレタリアートはいかなる階級からも援助を期待することはできない。彼らは自力で解放しなくてはならない。彼らの力はその大衆性にある。プロレタリアートが人民の多数をなし、人民の多数が階級闘争を闘い、国家制度や政治状況が人民の多数を国家の決定的要因にする所でのみプロレタリアートは勝利しうる。それゆえにプロレタリアートの解放を促進しようとする人は皆、民主主義すなわち民族自決権を要求しなくてはならない。民主主義的な諸権利の所有がそれだけではまだプロレタリアートの解放を意味しないのは勿論である――プロレタリアートの解放にはなお特別な社会的諸条件が必要である。しかし、プロレタリアートの解放は、政治的諸権利の所

有、あるいは獲得なしには不可能である。この権利が大きくなり、自決権が拡大すればするほど、プロレタリアートの階級闘争は他の条件が同じであれば、ますます容易になり、ますます見込みのあるものになるであろう。

このことは今まで社会民主党の中では自明のこととみなされてきた。帝国主義的な社会民主主義者たちもまた自民族のための自決権は否定しない。だが、彼らはこの原則をあらゆる民族に適用することを拒否する。彼らは民族の間に区別を設けるべきだと主張する。「大きな文化的民族」は、「発育不全の小民族をいくらか強制的に併合し吸収する」権利をもっているというのだ。[1]

だが、社会民主党の国際主義的性格は、これに対立している。この性格もこの党の民主主義的性格と並んで、プロレタリアートの生活条件と闘争条件に依拠するものである。さまざまな国や民族のプロレタリアは相互に異なった利害をもっていないし、まして対立する利害をもっていない。彼らはその解放闘争を緊密な協力の中でのみ遂行することができる。彼らにとって国際性は美しい夢ではなく、緊急の必要事なのである。

だが、国際性とは、私が自民族に対して要求するのと同じ権利を他民族にも認めることを意味する。一民族内部の個々の個人に対して民主主義によって要求される権利の平等が、民族共同体内部の個々の民族にとっても国際性の帰結とならねばならない。より高度の資格をもった大民族と資格の低い小民族、「文化的能力」の高い民族と低い民族、主人民族と奉仕民族といったような民族の区別は、近代の征服政策や植民政策の精神的用具であり、自国のプロレタリアートおよびすべての他国のプロレタリアートの不倶戴天の敵である。それは国際主義的思想と両立しない。

勿論クーノウは一八四九年の「新ライン新聞」の二、三の記事を引き合いに出している。彼はそれをマルクスの書いたものだとしているが、私はそれはむしろエンゲルスによるものだと思っている。だが、そのことは、ここでの我々の目的にとっては全くどうでもよいことである。あの論説はオーストリアのスラヴ人（ポーランド人を例外として）の民族的独立の努力に反対したものであった。それによれば、これらのスラヴ人は「その完全な消滅または非民族化に到るまで、反革命のファナティックな担い手にとどまる」ところの「没落しつつある民族」に属しているというのである。

スラヴ人のために「諸民族の至高の意志」に呼びかけ、「諸民族の兄弟のような交わり」を説いたバクーニンに反対して、あの論説の一つは、他の共和国メキシコに対して侵略戦争をしかけた一つの共和国、すなわち合衆国の例を挙げた。どちらの側にも民主主義があり、人民が至高の存在であった。だが、侵略戦争になったのである。我々はこの戦争を喜びをもって歓迎しなくてはならない、なぜなら、この戦争は「もっぱら文明の利益のためになされた」ものだから、というのである。それか

らこの論説は嘲笑している。

「そして最後に、一般にヨーロッパで大君主国が『歴史の必然』となった時代に、ドイツ人とマジャール人が、これらすべてのいじけた無力な小民族をまとめて一大国として、彼ら独りでは全然知らずに終わったであろう歴史的発展に参加できるようにしてやったのは、なんという『犯罪』、なんという『呪うべき政策』であろうか」。

これらの文章は、たしかにクーノウがそこから読み出したものを意味している。それらは、すべての併合主義者や侵略主義的政治家をほくそ笑ませるにちがいない。

我々は何よりもまず、一八四九年という論説の日付に注意しよう。史的唯物論の深化と成熟、およびその適用は、まさに一八四八年の革命の挫折の後十年間に最も重要な前進を示したことが、今や知られている。多くの他の問題と同じく戦争の問題においても、マルクスとエンゲルスはインターナショナルと『資本論』の時代には、共産党宣言の時代とは全く異なる態度をとった。前の立場と後の立場とが異なっている所では、我々にとっては後の立場の方が前の立場よりも重要である。

ドイツ＝フランス戦争に関するインターナショナルの回状の中に見られるマルクスによる征服戦争に対する断罪は、我々にとっては一八四九年のそのような戦争に対する条件付き承認よりもはるかに重要である。

しかもクーノウによって引用された文章は、彼がそこから読み出した全てを決して意味するものではない。エンゲルス（あるいはマルクス）が、「一般にヨーロッパにおいて大君主国が歴史的必然となった」「時代の」ドイツ人とマジャール人の政策について語ったことは、明らかに過去に関するものであって、現在の我々の政策に関するものではないのである。さもないと人は、マルクスとエンゲルスを同じ権利をもって民族的抑圧の擁護者としてのみならず、王朝政策の擁護者として、「歴史的必然」であっただけでなく、今日でもなおそうあり続けるところの君主国の偉大さと暴力的拡大の擁護者として特徴づけることになるだろう。

さらにマルクスとエンゲルスが一八四九年に、実際に一定の条件の下で侵略の権利を擁護したとしても、それは非常に幸運にも引き合いに出せるような証拠をもってそうしたわけではなかった。

テキサスにおいては、明白な人民の意志について語ることはほとんどできない。ドイツよりも大きいこの土地は、メキシコからもぎとられた三〇年代に、わずか四万人の人口を数えたのみであり、その中の最も精力的な部分は合衆国からの移民であった。メキシコに対する反乱の旗を掲げ、テキサスを独立した共和国にし、十年の経過の後一八四六年に合衆国と合体したのは、これらの移民たちであった。メキシコは戦争によってそれを阻止しようとして、打ち破られた。この「征服」はきわめて風変わりで、多義的な性格をもったものである。

だが、それは決して「もっぱら文明の利益のために」なされたことではなかった。合衆国からの移民は、大部分黒人奴隷所有者、つまり新しい安価な土地を探している農園所有者であり、特にメキシコで奴隷売買が禁止されたがゆえにメキシコ人の支配に反抗したのであった。テキサスの併合によって、アメリカ同盟の奴隷所有者は、南北戦争に際して、南軍の側に立った新しい奴隷国家を手に入れたのである。

アメリカの例に劣らず不幸なのは、「完全な消滅か非民族化」に向かっており、それまでは必然的に「反革命のファナティックな担い手」であるとされる「没落しつつある民族」としてのオーストリアのスラヴ人の特徴付けである。勿論一八四九年にはそのように見えたかもしれない。だが、それ以後の全発展は、この見解がどれほど誤ったものであったかをきわめて明瞭に示している。まさに彼らを引き合いに出すことほど、笑うべきことが他にあるだろうか。クーノウが今日なお敢えてオーストリア・スラヴ人の生活能力の欠如を証拠として提出するのを見ると、他の証明材料の完全な欠如を証明しているにすぎない。どの程度の政治的無学者たちを、クーノウは自分の読者にしうると信じているのであろうか。

オーストリアのスラヴ人がいつでも反革命的であり、ドイツ人、マジャール人、ポーランド人がいつでも革命的であったというのも決して正しくはない。さまざまな民族を相互に反目させ、それによって政府をこれらすべての民族から独立させるというのが、オーストリアの統治技術の原則であった。その際、あの時にはある民族が、他の時には他の民族が寵遇された。寵遇されない民族はいつでも革命的に、寵遇されている民族は反革命的にふるまった。オーストリアの大民族のいずれも、最近百年の間しばしば全く突然に、大逆罪と卑屈な追従の間を揺れ動いた。オーストリアの大民族の指導者には、絞首台と大臣の椅子とがウインクしていた。このことはチェコ人、クロアチア人、ルテニア人に対してと同様、マジャール人、ポーランド人、ドイツ人に対しても当てはまる。すでに一八四八年において、その前兆は認められた。チェコ人は決して初めから反革命的ではなかった。ヴィンディシュグレーツを霰弾でやっつけた最初のオーストリアの反乱は、プラハにおけるチェコ人の反乱であった。ところがウィーン人は新たにかち得た自由の最初の日々に、明白に革命的ではなかったので、ラデツキーの軍隊にたくさんの熱狂的な志願兵を供給し、この軍隊がイタリア革命を粉砕したのであった。

一八四八年のオーストリアの革命は、チェコ人やイタリア人に対する支配権を求めるドイツ人の努力、クロアチア人を支配したいというハンガリー人の努力、並びにそれに起因するスラヴ人の反革命的態度のゆえに挫折した。

もし一八四九年の革命から教訓を引き出そうと思うならば、それはただ民族自決という国際主義的立場を放棄したすべての近代の革命運動はどれほど自らを危険にさらすかという点であ

ろう。

たとえマルクスとエンゲルスが、一八四九年にオーストリア・スラヴ人の歴史的未来を全く正しく評価していたと仮定しても、そのことは今日戦争の中で高まってきている民族自決の要求を否定するものでは決してない。マルクスもエンゲルスも、一民族の他民族に対する支配、この支配を貫徹する手段としての戦争を宣言することなど思いもおよばなかった。彼らが宣言したものは、個々の民族に対するヨーロッパ革命の支配であった。彼らは全面的な革命に対立し、これを危険にさらす所での個々の民族の自決への衝動を拒絶した。それによって彼らは国際主義的立場との対立に陥らなかっただけでなく、むしろそれが国際主義的立場の必然的帰結であった。

まさに諸民族、とりわけ近代生産様式内での労働者階級は、その繁栄において互いに最も緊密に依存しあっているので、社会的進歩とそれを妨害するものの排除に彼らは皆同程度に関心をもっているのである。一八四九年革命の挫折によって、オーストリアのあらゆる民族は、反革命派としてこの挫折に貢献した民族も、革命派として行動した民族も同程度にひどい目にあったのである。革命が勝利していれば、これら諸民族の力はずっと強化されていたであろう。勿論、自由は民族的平和をもたらさなかったであろうが、それが階級闘争を解き放ったように、民族闘争を初めて解き放つことになったであろう。そして、それによってあらゆる民族の精神的、経済的飛躍が促進されたことであろう。それを証明するのは、一八六六年の敗北に続くオーストリアの相対的に自由な時代である。それは、なによりもまずドイツ人とマジャール人の支配をもたらしたが、同時にオーストリア・スラヴ人の飛躍をもまた抵抗しがたきものにした。

個々の民族の要求を近代社会全体の要求に従属させることを、後にマルクスとエンゲルスは、ヨーロッパ革命との関連においてのみならず、あらゆる関連において要求するようになる。戦争、特に世界戦争ほどに、社会を危険にさらし、麻痺させるものはない。それゆえ、エンゲルスは民族や民族部分の自決の貫徹のために世界戦争に訴えることに繰り返し反対したのであった。この精神でエンゲルスは、たとえば一八八二年にダルマチア（クリヴォシュチェ）の蜂起に際して、ベルンシュタインへの手紙で次のように述べたのであった。

「我々は西ヨーロッパのプロレタリアートの開放において一緒に協力しなければならないのであって、他のことはすべてこの目的に従属させなければなりません。そして、仮にバルカンのスラヴ人たちがなおかなりの関心を引くものだとしても、彼らの開放衝動がプロレタリアートの利益と衝突することになれば、私にとっては彼らなどどうなろうと構わないのです。エルザス人も抑圧されていますが…もし彼らが目に見えて近づきつつある革命の前夜に、フランスとドイツとの間の戦争を挑発し、この両国民を再びけしかけて、そのために革命を延期させようとするならば、私は次のように言います。そこで止まれ！　君

たちはヨーロッパのプロレタリアートと同様に忍耐心をもつことができるのだ。ヨーロッパのプロレタリアートが自己を開放すれば、君たちも自ずから自由になるのだ。だが、それまでは我々は君たちが闘争的なプロレタリアートの邪魔をするのを我慢しないのだ」。

ここで民族自決権は、勿論全般的な社会発展の必要に従属させられている。そして、社会発展の最も強力な推進力をなすものは、プロレタリアートの階級闘争だとされているのである。だが、それによって民族自決権が拒絶されているのではなく、その全面的な貫徹がむしろ我々の勝利の必然的な結果として承認されているのである。自決権を貫徹させる特別な方法のみが拒否されているのだ。エンゲルスは、この目的の手段としての世界戦争を否定した。そして、彼はこの目的を放棄することなしに、それをすることができた。というのは、彼はプロレタリア革命というより良い、より有効な手段を求めて努力していたからである。

革命と戦争は民族自決権を貫徹する二つの方法である。ブルジョアジーが革命的であり、革命を信じ、革命を目指して努力していたかぎりで、彼らはまたもっぱら革命の中に、政府に対する民衆の闘争の中に、民族自決を貫徹する手段を見たのであった。自由な憲法を獲得するという方法によってであれ、外国支配の存在する所で、それを振り落とすという方法によってであれ。さまざまな国の民主主義的諸党は、その際お互いに援助し合い、インターナショナルの発端を形作った。彼らに対抗して、君主たちもまた国際的に結集した。一八一五年から一八四八年の時代にヨーロッパに戦争はなかった。

一八四八年以後、ヨーロッパのブルジョアジーは、自らの革命的能力を疑い始め、革命をプロレタリア的な力として恐れ始めた。彼らが民族自決の努力に固執するかぎりで、彼らは、ますますそれを他民族を考慮することなく、自民族の自決への衝動に限定するようになった。そして彼らはこの目的を、もはや政府との闘争によってではなく、彼らが他の政府に反対して支持しているところの個々の政府との協定によって達成しようとした。ナポレオン三世、ヴィクトル・エマヌエル、ビスマルクが、今やその先導者となった。つまり、彼らは民族自決権を実現するための手段として、人民の革命の代わりに王朝の戦争をもってきたのである。一八一五年から一八四八年までの世代が、政府と絶えず繰り返される革命的反乱の間で、ヨーロッパの全面的な平和が保たれた時代であったとすれば、それに続く世代はヨーロッパ戦争の時代となり、革命的反乱はせいぜいその随伴現象として現れたのみであった。

この新しい方法は、きわめて不完全にしか貫徹しなかった。それは未回収のイタリアを残し、ポーランド問題に触れず、ドイツ系オーストリア人をドイツから放り出し、領土に基づく民族自決を軽蔑しながら、ドイツ帝国を拡大した。その領土の併合が、民族的熱望を満足させずにかえって傷つけ、国際的な紛

争の火種を一掃するどころか、新たに作り出した。そして、それはバルカンに独立した、ロシアからもオーストリアからも自立した大国家の出現することを妨げた。

勃興しつつあるプロレタリアート党は、この方法を民族自決の貫徹のために受け入れることはできない。彼らはブルジョア政府の戦争を社会発展の最大の障害として拒絶する。現存政府のいずれかに民族解放の使命を委託することなど、彼らの思いも及ばぬことである。我々は現存政府のいずれにも、この目的のために戦争に訴えるよう勧めたことはない。しかも、我々がひとたび勃発した戦争の後で他の人々を誤り導き、戦争をしている政府の一方に、未だ開放されていない民族の解放の日まで戦争を続行するよう要求することは、きわめて非論理的であろう。それはすなわち、解放が異論の余地なく成功する時でさえ、世界戦争において平和を緊急に必要としているヨーロッパの全体利益の上に、その民族の特殊利益をおくことになるのである。そのうえ、我々は勝利したブルジョア政府が民族自決権を尊重し、勝利者としてのその権力を抑圧された民族の解放を越えて濫用し、敵対する地域の征服によって、民族自決の新しい侵害と新しい民族対立をもたらさない、という最低限の保障さえもっているわけではない。

いわゆる民族解放という目的のためのブルジョア政府の戦争の開始と続行に対して、我々が断固として反対しなければならないとしても、そのことは我々が戦争の勃発とその後の継続を阻止することのできない所で、その終結の形態が我々にとってどうでもよいということを意味するものでは決してない。今日の諸関係の下では、我々は国境の変更をもたらす手段としての戦争を拒否する。だが、それにもかかわらず国境変更がもたらされる所では、我々は我々の歓迎しうるような変更と我々が戦わなければならない変更とを区別しなくてはならない。そして、ここで民族自決の原則が実際に適用されるのである。我々国際的社会主義者は、当該地域の住民によって拒否されるような国境変更はすべて拒否しなくてはならない。その際我々は、労働者階級の代表として、ある民族によってすでに手を加えられている所のみを、その民族の領域とみなすことができる。それはある民族が所有している、あるいは支配している領域と必ずしも一致するわけではない。従来の所有関係と支配関係の保持のためには、国際社会民主主義者はなんら尽力しない。ダヴィットによって起草された戦争目的についての指導原理を、一九一五年八月一五日のドイツ社会民主党の帝国議会議員団と党委員会が受け入れ、その第一節において次のように宣言した時、それは国際社会民主主義の精神に合致するものではなかった。

「ドイツ帝国の政治的独立性と不可侵性とは、その領土的勢力範囲に向けられた敵の侵略目的のすべてを撃退することを要求する」。

国際社会民主党は、帝国の必要からではなく、人民の必要から出発する。そして帝国の「勢力範囲」の独立性と不可侵性で

はなく、人民が住み、手を加えている領域の独立性と不可侵性をすべての人民のために要求する。我々は労働者の党であって、権力者の党ではない。

あの指導原理の第三節の表現も、それに劣らず国際社会民主主義の精神に矛盾している。いわく、

「ドイツの安全と南東における経済活動の自由の利益のために、オーストリア＝ハンガリー並びにトルコの弱体化と崩壊に向けられた連合国のすべての戦争目的を拒否するものである」。

ここではまた、オーストリアとトルコの諸民族の自決と欲求については全く語られていない。これら諸民族が何を望み、何を必要としているかはここでは考慮されず、ただドイツが彼らからどのような利益を引き出しうるかのみが語られている。彼らはダヴィットの決議の中では、ただドイツの道具と見られているにすぎない。それは徹頭徹尾非民主主義的で、ナショナリスティックに考えられている。国際主義的に思考する人にとっては、あらゆる民族が同等に価値あるものであるが、ナショナリストの心を悩ますのはただ自民族のことだけである。彼は、他民族に関してはただ、それがどれほど自民族に利益を与えるか、あるいは損害をもたらすかを問うだけである。

以前に長い間そうであったように、ドイツが現在偶然にロシアと同盟するようなことがあれば、その時には、ダヴィットの原則によれば、ドイツ社会民主党は「ドイツの安全と東方における経済活動の自由の利益のために」「ロシアの弱体化と崩壊に向けられた戦争目的」のすべてを拒否することになろう。

しかし、ロシアは反対側に立っているので、ダヴィットは彼の指導原理の第五節（当時は無論受け入れられなかったが）で要求した。

「占領されたロシア領ポーランド地域を、ドイツおよびオーストリア＝ハンガリーと同盟した一つの独立国にまとめること」。

「領土的勢力範囲の不可侵性」は、それゆえダヴィットにとっては、すべての国家のために提出されるべき国際主義的な要求ではなくして、ただ単にドイツとその同盟国のための要求にすぎない。ロシアに対しては、彼はその勢力範囲のかなり大きな侵害を要求している。彼はエルザス＝ロートリンゲンに対して拒否したものを、ポーランドに対して要求している。だが、それはポーランド民族の自決の名においてなされているのではない。ポーランドの「ロシアによって占領された」部分のみが「独立」すべきだというのであるが、独立はその直後に直ちに再び破棄されてしまうであろう。なんとなれば、「独立した」ポーランド国家は、ドイツおよびオーストリアとの同盟を命じられており、その外交政策は初めから拘束されているからである。

これらすべては、ドイツ民族主義的思考であって、国際主義的思考ではない。それはまた民主主義的でもない。それゆえまた社会民主主義的でもない。

二、原始的民主主義

社会民主党は国際主義的、民主主義的政党として、いつでも民族自決権に賛成している。だが、社会民主党自体が特定の歴史的諸条件の産物であり、これら諸条件――資本主義的生産諸関係――が欠けている所では発生することができないように、民族自決もまた一定の歴史的諸条件に結びついている。それは異なった民族においては、異なった意味をもち、同一民族の内部でも時代が異なれば非常に異なった意味をもつのである。

それゆえ、自決権の適用に際して、すべての民族を十把一からげに取り扱うことに反対するのが、正しいのであって、この論拠に異議を唱えることは正しくない。なぜなら、我々はこの種の千編一律と絶えず闘ってきたからである。

一八九三年に初版が出版された『議会主義と社会民主主義』に関する私の著作以来、私は繰り返し近代民主主義と原始的民主主義の違いに言及してきた。この違いは、一定の歴史的諸条件の下で、民族自決が取りうる形態を理解するために根本的な重要性をもっており、したがってまた、社会民主党の平和綱領にとっても最大の重要性をもっている。それゆえ、我々がさらに進む前に、ここでもう一度この違いをスケッチしておこう。この問題をより詳細に検討しようとする読者のために、私は上述の著作と並んで『民族性と国際性』（『ノイエ・ツァイト』補巻、一号、一九〇八年）という私の論文を挙げておきたいと思う。

人間は、本性からいってただ単に社会的存在であるだけでなく、民主主義的な存在でもあり、あるいはむしろ民主主義的な活動への衝動が、動物的祖先から受け継いだ人間の社会的存在の側面の一つである。

個々人の生存と繁栄は、彼が生きている社会の存続と繁栄にかかっている。それゆえ、すべての個人は社会問題に最大の関心を抱いている。社会は彼に仕事を与え、彼は社会に働きかけようとする。その際もともと個々人は――少なくとも同性の者および同年齢層の者は――お互いにほぼ完全に平等である。勿論個人間の自然的差異――ある人が他の人よりも強く賢いために社会の中でより大きな影響力をもっているというような――は存在する。だが、この差異は原始的な諸関係の下では、きわめて狭い限界内に存在するにすぎない。すべての人は同じ条件の下に生きており、生産手段や武器は単純で、すべての人によって獲得され、製造される。何人も他の人々にいつまでも秘密であるような知識を手に入れることはできない。何人も他人の主人となることはできず、他人の力によって自分自身の力を強化することもできない。個人の名声が、彼の個人的業績によって社会の中でどれほど高まろうとも、彼は依然として全体社会に従属している。全体社会は彼よりもはるかに強力である。何人も全体社会を支配することはできず、すべての人は全体社会に奉仕しなければならない。依然として全体社会が最高の機関である。この全体社会は、少なくともすべての成人に達した人々

の出席する全体の集会において姿を現す。

この素朴な民主主義は、定住地の獲得、農業の発展、都市の発生に到るまで、今までの人類史の大部分の間保持された。マルク共同体、村落共同体、都市共同体ももともとは民主主義的に組織されていた。

この民主主義は口頭のやり方に頼っていた。すべての公的な事柄は、口頭でのみ討論され、選挙は発声投票によって行われ、共同体の法律、権利、歴史は口伝えで伝承され、社会にとって重要なニュースはすべて口頭で広められた。

口頭による方法がもっぱら用いられたということは、本質的に不変な生産過程の単純さに起因するものであり、実例と口頭による伝授によって有史以来変わることなく、父から息子へ、母から娘へと継承されるわずかな知識を前提とするものである。それは狭いサークル内で行われ、個人的な話し合いによってすべてを解決することのできた経済関係の狭さに起因するものである。人民大衆は、経済活動のための読み書きを必要としなかった。この知識は彼らにとって不要のものにとどまったが、政治の目的にとってもそうであった。原始的な民主主義共同体は、それ自体の中に限界をもっていた。この共同体はその領域を、すべての成員にとって至高の人民集会に出席し、そこで発言し、その討議を理解し、その決定と選挙に口頭投票によって参加する可能性を残す範囲までしか拡大することはできなかった。

この限界を越えての共同体の拡大は皆、民主主義の犠牲を伴った。マルク共同体と市町村の原始的民主主義の、より大きな共同体、すなわち国家への結集は、この民主主義の上に立ち、それを支配する権力の創出によって行われた。このような結集は、そのような権力が可能となった時に初めて起こった。国家は初めから支配のための組織であり、民主主義の敵である。このことはまた、古代のいわゆる民主主義国家にも当てはまる。これらの国家もまた、国家権力を我が物としていた一階級による人民大衆の支配と搾取の組織であった。これらの国々における民主主義的なものとは、他の共同体（自分の共同体内部では同様に不自由で権利のない労働者）に対する支配者として登場する民主主義的に組織された共同体というにすぎなかった。

ともかく、この種の民主主義国家はどこでも長く存続することはできなかった。原始的民主主義が依拠していた人民大衆の知識も組織形態も、その支配的性格から生じてくる国家の諸課題にとって十分ではなかったのである。これらの課題には、外交政策と戦争の課題も含まれていた。

原始的民主主義の共同体は、我々がすでに見たように、それ自身の諸条件の中にその限界があった。そのような共同体がひとたび定住するようになった所では、その領域を拡大しようという欲求がもはや感じられなくなった。自然の豊かさが、時折その人口をこの限界を越えて増大させることもあった。その結果は、共同体の領域の拡大への努力ではなくして、新しい共同体創出のための過剰人口の放出であった。そのために必要とさ

れる領域は、たとえば森林の開墾によって自然から獲ち取られるか、あるいはより弱い民族から奪い取られた。かくして、人口の増大という自然の原因から時々戦争が起こった。

原始共同体の統合から形成される諸国家においては、事情は違っている。それらはそれ自身の中にいかなる限界ももっていない。新しい支配組織は無限に拡大され、絶えざる拡張への衝動を生み出す。なぜなら、国家を支配している階級の富と権力とは、国家の大きさとともに増大するからである。拡大への衝動は、どのような国家においても、国家が大きくなる程度に応じてますます強力になる。というのは、大きくなればなるほど、その国家の権力が他の国家の権力に比してそれだけ強力になるからである。その結果は、強国の絶えざる戦争への渇望と、弱小国家の絶えざる防衛の必要であり、絶え間のない戦争の危険とひんぱんな戦争である。このことは、もはや莫大な人口増大という自然の必要から来るものではなく、支配階級の富と権力への際限のない衝動に由来するものである。国家の出現とともに、民主主義は死滅し、不断の戦争の危険が増大する。このことは、決して資本主義や帝国主義の特別の表象をなすものではない。後者は、あらゆる国家権力のあの古い衝動の中にただ新しい契機を持ち込んだにすぎない。

だが産業資本主義は、この発展を終わりにする要因を生み出した。それは自らの墓掘り人、すなわち、産業プロレタリアートと近代民主主義の諸条件を生み出したのである。

三、近代的民主主義

産業資本主義は、その出現まで社会の中ではるかに優勢な生産形態をなしていた個々の作業場や家庭での自家用のための生産を終わりにした。今や商品生産が生産の普遍的形態となり、以前は主に贅沢品のみに奉仕していた商業と貿易が、今やますます大衆消費財をも扱うようになった。途方もない方法で物と人とを大量に遠距離に輸送するための手段が発達してきた。人と人との間の意思疎通のための口頭による方法は、ますます十分でなくなった。同時に自然科学が技術を捉え、絶えざる変革過程の下においた。口頭によって伝えられる慣習は、生産においてますます十分でなくなり、少なくとも個々の手順の科学的理解が、生産の指導者にとってのみならず、たくさんの労働者たちにとってもますます重要になってきた。

交通の拡大と結びつきの強化ならびに自然科学による技術革命は、読み書きの知識を資本主義的生産様式においてますます大衆の必要物とした。この知識は、恵まれた上流階級の特権であることをやめた。

それと同時に、大衆新聞や大衆文学のための諸条件が生まれ、支配階級から独立して人民大衆に奉仕する知識階級のための物質的基盤が作り出された。口頭による伝承に基づく民衆語、すなわち方言の域を脱した書き言葉が、今やそれ自身民族語となり、書き言葉が到達しうる範囲に及ぶ新しい民族意識の形成へと導いた。書き言葉の共通性から、近代民族が生まれた。

すべてこうしたことは、人民大衆が国政に注目し、彼らの状況が単にすぐ近くの環境の形態に依存するだけでなく、国家全体の状態や政策にどれほど依存しているかをますますはっきりと認識するようになる方向へと導く。そして、個々の階級の状況の国政への依存の程度は、資本主義的生産様式が発展するにつれて、ますます増大する。なんとなれば、国家権力の経済的課題と力とがそれだけますます強力になるからである。

だが、この依存の増大は、ただすべての階級の国家の政策に対する関心の増大を生み出すだけではない。それはまた、彼らがこの政策に積極的に参加してくれることを、国家権力そのものにとってもますます不可欠なものとする。というのは、国家権力の課題が大変多様なものになり、そのメカニズムも非常に複雑なものになるので、たくましい社会の推進力と、その妨げられることのない批判とコントロールが、このメカニズムに作用しないならば、それはますます容易に停滞してしまうからである。すでに資本主義国家の始まりにおいて、封建国家の大土地所有者が管理していた素人の国家行政を、広範な分業を伴う熟練した職業官吏の体系によって置き換えることが必要になった。しかし、官僚機構が増大し、その権力が増せば増すほど、それは社会の奉仕者からその主人となり、自らの職業的利益を社会の利益の上に置くようになる。それが鈍重になり、形式主義的になればなるほど、その腐敗と偏狭さも増大する。官僚制を社会に服従させること、官僚の秘密主義に自由な出版物による批判を対置し、官僚組織に自由に形成された政党組織を対置し、国家官僚制の中央集権化された尖端、すなわち政府には、民衆の支持のみによって成り立ち、民衆の権力によって動く中央集権的団体、すなわち議会を対置すること、これは人民大衆にとっての必要事であるばかりでなく、その権力手段が腐敗し、大衆がまだこのような政治制度を手に入れることに成功していない所では国家自体にとっても必要事である。かくして、もはや原始的民主主義、種族民主主義、自治体民主主義、マルク共同体民主主義とは違う国家の民主主義であり、それによって国家を近代国家にする近代民主主義が誕生する。

この運動は、資本主義的生産様式の発展の必然的結果であり、それと同様とどめがたいものである。この運動は大都市、特に首都において始まり、徐々により小さな都市や田舎をも捉える。

しかし、近代民主主義運動が強力になればなるほど、反動階級――その克服によってこの運動が生じたのだ――の外部にもまた強力な対抗傾向がますます復活してくる。近代民主主義が資本主義的生産様式の産物であり、その初期には産業資本家自身によって推進されたとしても、今やこの同じ生産様式が近代民主主義によって没落の危機に立たされている。なんとなれば、民主主義の前進は人民大衆の政治権力の前進を意味し、資本主義的生産様式の前進は、人民大衆のプロレタリアートへの転化の前進を意味するからである。この過程の避けることのできない究極目標は、プロレタリアートによる政治権力の獲得である。

支配階級は全力を挙げてそれを阻もうとする。

近代民主主義の通常の機能を特徴づける三つの大きな手段は、出版物、党組織、議会である。

出版物の力はおそろしく高まっている。だがそれと同時に、それはまたますます資本主義的階級支配の道具ともなっている。いくつかの新聞は巨大な資本主義的組織となっており、ニュース伝達の最も重要な手段である大電信局は、政府の独占物となっている。政府と大資本家の一味がますますニュース・ソースを支配し、人民大衆はそこから政治的情報を得ているのである。

政党もまた国政に影響を及ぼす程に大きくなった所では、職業上もっぱら政党に奉仕する一連の政治家や行政官僚を必要とする。そして、そこから民主主義、すなわち人民大衆による政治の実際的支配に対する同様な弊害と抵抗——我々がすでに国家官僚制の特徴として知っているもの——がより小規模ではあるが、しかし決して改善された形ではなく現れてくるのである。

その最悪の精華が、議会における職業政治家主義であり、それが議会クレチン病、すなわちすべての政治的思考を議会における活動に限定し、外界に法律を押しつけるが、外界からはいかなる法律も受け取らない一つの世界と自らをみなす方向に導くのである。

最後に、議会選挙においても資本主義的出版物の影響と並んで、資本家階級の直接的な経済的優位が貫徹する。そして、この優位は企業家の組織が範囲と結合を増せば増すほど、一般に減少しつつあるのではなく、増大しつつある。労働者の組合は、労働者に経済的実力の最大限を保障するために不可欠である。彼らはこの最大限を与えられた条件の下で拡大することができるが、資本家階級の経済的優位をなくすことはできない。個々の資本家がばらばらの労働者に対してもっているこの同じ優越した地位が、組織された労働者を組織された資本家の意のままにさせるのである。労働者の組織が、資本家のそれよりも早く急速に発達した時と場所においてのみ、重点が一時的に労働者に有利な方向に移ることがあるだけである。

こうした対抗傾向のすべてが、近代資本主義国家では民主主義が決して完全な物になることがありえないこと、民主主義はプロレタリアートの勝利の後に初めて社会主義社会の政治形態としてのみ完全な物になりうるという事実の原因なのである。

だがそれと同時に、この対抗傾向が経済的発展から生ずる民主主義とプロレタリアートの前進を阻む程に十分強力であるとも言えないのである。それはただ一時的にその前進を阻むことができるだけである。妨害の弊害があまりに大きくなって、広く感じられるようになり、無教育の、誤った情報を与えられている人々でさえも気づくようになるからである。この妨害の最終的克服は、政府の転覆であれ、政党の分裂その他同様のことであれ、なんらかの大破局によって起こるのである。

その本質からいえば、民主主義は本来平和的な政治的発展を保障するものである。しかし、近代民主主義が未だこのことを

成し遂げておらず、時々の政治的大破局から免れていないのは、それが経済的に支配する勢力、すなわち産業資本主義の産物であると同時に不倶戴天の敵でもあるという事実によっている。

四、民族の国家への適合による近代民族国家の形成

社会的共同作業と相互活動、それゆえあらゆる社会的関係と結合の不可欠の手段は言語である。言語の共通性は、人々の間に強力な絆を作り出し、言語の相違は、人々の間に越え難い障壁を作り出す。

共同体の中で、その政治が民主主義的に、人民大衆によって遂行されるべきであるとするならば、政治の言語、政治的アジテーションと情報の言語、政治的討論と決議の言語、行政と判決の言語が、人民の言語、すなわち民衆のすべてが自由にしうる言語でなくてはならないという前提がある。それは原始的民主主義の共同体においては自明のことであった。その共同体の上にそびえ立つ国家においては、民主主義とともに言語の統一もまた失われた。我々はすでに国家の拡大衝動が際限のないものとなり、権力関係のみが一つの限界をなしていたということを見てきた。全く異なった言語をもつ民族分子が、一つの国家の中に集められた。さしあたり、彼らには地方自治が与えられた。主に租税の徴収、軍隊のための募兵、道路建設、等々といったことからなる国家の課題にとっては、それぞれの地域における国のわずかの代表者が、そこで日常使われている言語を理解できれば十分であった。

小さな原始共同体が生活していた孤立性から見て、彼らの間で話されていた言語の相違は大きなものであった。かくして、その内部に言語の相違――単に方言の相違だけでなく、語族の相違も――がないような大国家はほとんど存在しなかった。明白な民族国家とみなされている一国家、たとえばフランスにおいてさえも、一八七二年になおピレネー山脈の中の国民の間にバスク語を話す人が一六万人、スペイン語を話す人が一〇万人、南東部ではイタリア語を話す人が三五万人、ブルターニュではブルターニュ語を話す人が百万人を越えていた。ベルギー国境に沿った若干の北の地域では、フラマン語が民衆語である。

近代民主主義が登場した時、民衆語を国語に、すなわち政治、立法、行政、裁判、公教育の言葉にすることが必然的な目標となった。

それは、二つの方法で達成されるはずであった。つまり、国語以外の言葉を用いている国内のすべての人々が、国語を習得して自分自身の言語にするか、あるいは国家が一言語領域に自らを限定し、同じ言語を話している人々全部を国内に集め、これまで国内で他の言語を話してきたすべての人々を領域の外に放り出すような国境確定をしなくてはならなかった。そのために決定的な役割を果たしたのは、もはや話し言葉ではなく、書き言葉であった。書き言葉は、方言が極度に異なっているので、口頭による意思疎通がしばしば妨げられ、違和感が生き続ける

人々の間の意思疎通および共同作業と相互作業の手段として形成されたものであった。

二つの方法のうちの第一のものは、すでに近代民主主義の登場以前に見られたものであり、あらゆる領域にユニフォーム——単に兵士や官吏の制服だけでなく——、すなわち画一性をもたらそうとする国家官僚たちによってなされたものであった。支配階級の言語が国語となり、今やその知識が国内で他の言語を用いている人々にも強制されることになる。学校で、法廷で、役所で、国語以外のあらゆる他の言語の使用が禁止される。このことは、役人たちにとって巨大な便宜を意味するだけでなく、国語を母語とし、すでに家庭の中で身につけている国内のすべての人々にとっての優位を意味する。これらの民族部分の下層階級といえども、一定の優位を獲ち得、支配階級の感情のいくらかを手に入れる。同時に、他の言語を話している民族部分の上層階級自体も、それによって不利益を受け、被支配階級の立場へと追いやられる。かくして、一方では、同じ階級内部に民族対立が形づくられ、他方では、さもないと敵対することになる異なった階級が言語の共通性とそこから生ずる利益の共通性によってお互いに接近させられている。どちらの方法によっても、階級闘争は曖昧にされ、歪められる。官僚の暴力的な民族的画一化の方法に対する闘いが、勃興しつつある民主主義の官僚制に対する闘争の一部をなしている。

暴力的ではないが、それだけ確実に作用するのが、資本主義的生産様式の前進から生ずる交通の増大である。

このことは勿論国家を、かつて原始共同体がそうであったように、本質的に自足する特殊な経済領域に変えるものではない。資本主義的生産様式は、初めから国家間の交通に依拠している。だが、資本主義的生産様式が、たとえ国家を特殊な経済領域に変えることがないとしても、ともかくも特殊な交通領域、内部市場にはするのであり、その内部における交通は外部市場との交通よりも、より緊密で障害も少ないのである。地方的、地域的な通行税はなくなり、代わって多かれ少なかれ高率の関税障壁が国境に設けられる。国家には、最も重要な交通手段、つまり国道、運河、鉄道を整え、運転するという任務が課せられる。それらは、なによりもまず外部交通ではなく内部交通に奉仕し、その必要に適合するようになる。国内交通は、国際間の交通よりもはるかに緊密である。国内交通は、国際間の交通のようにただ商人が接触するだけのものではなく、住民のすべての部分が——単に偶然にではなく、ますます恒常的に——相互に接触する。

国内でさまざまな言語が話されている場合には、今や単に統治階級の必要からだけでなく、あらゆる階級の経済的必要から、すべての人が知っている交通語の必要性が増大する。交通語になるのは、初めから国内で経済的に最も発達した民族の言語であり、この民族が同時に最も数も多く、政治的に支配する民族である場合にはなおさらそうである。社会の中で立身出世しよ

うとするいくぶん活動的な人物は皆、この言語を習得しようと努力するであろう。

交通の増大は、同時に国内での人の移動の増大を必然的に伴う。資本主義的生産様式は、至る所で労働者数の相対的減少、すなわち投下された資本の大きさに比しての減少の傾向を生み出す。工業にあっては、この傾向は資本の急速な増大による補填よりも大きくなる。農業にあっては、資本はきわめてゆっくりとしか増大しない。ここでは相対的減少が容易に絶対的減少になる。それゆえ、我々はあらゆる資本主義国において、単に自然増加の結果としてだけでなく、農業から工業への強力な流入の結果としての工業労働者の絶えざる増加を見るのである。言語的に混淆している地域においては、このことは農業人口のみからなる民族にとっては、他の言語を話している工業地域への成員の絶えざる引き渡しを意味する。その外国語は移住者によって習得され、身につけられる。純粋な農業民族は、ますますその最も精力的で、最も知的な分子を工業民族に引き渡すのである。田舎は全般に都市との対立の中で精神的に荒廃し、貧しくなっているが、このことは工業民族に対する農業民族にも当てはまる。それが、あらゆる知的分子の無抵抗と農業民族からの逃亡を増大させているのである。かくして、農業にとどまる民族は、多民族国家の中で徐々に吸収され、遂には、消滅してしまうのである。彼らの没落は不可避である。

これが、一八四九年にマルクスとエンゲルスが、その「完全な消滅と非民族化」が不可避的なものだと宣言したあの「民族の屑」なのである。それらは、たとえばスコットランドのゲール人、フランスのブルターニュ人、スペインのバスク人、チロルのラディン人、プロイセンとザクセンのソルブ人あるいはヴェンド人、等々である。一八七〇年頃にプロイセンにはまだ八万六千人のヴェンド人がいたが、一九〇五年には六万三千人であった。ここではまだ北アメリカ・インディアンにおけるような人種の死滅は起こっていない。反対である。むしろ、あの経済的に最も遅れた民族が概してきわめて豊かなのである。民族の死滅と思われるものは、単に交通にとって不要なものとなった言語の放棄にすぎないのである。

一国家内部の大民族による小さな「民族の屑」の吸収のこの過程を、大国家による小国家の吸収と混同してはならない。この二つの過程はしばしば同一視される。両者ともに、あらゆる領域で小経営から大経営へと移っていく資本主義的生産様式の必然的結果とみなされている。それは全くマルクス主義的に響き、事実マルクス主義だといわれているが、決してそうではない。経済の中にただ政治の究極の原因を見る代わりに、この見解は経済の法則をそのまま政治を支配する法則にしてしまうのである。このことは、動物有機体の法則を、一律に社会有機体に適用する見解に劣らず誤っているのである。

我々は、さまざまな民族の小共同体の吸収による国家の拡大への絶えざる努力は、資本主義的生産様式に特徴的なものでは

なく、むしろその本質から見て国家に初めから内在するものであるということを見てきた。資本主義的生産様式が近代民主主義の傾向を生み出したかぎりでは、それは民族国家の形態を最も目的に適った国家形態とすることによって、国家を支配する階級の拡大衝動を制限したのであった。民族的に異質な地域を新たに強制的に併合することは――この地域がすでに近代国家の形で強力な政治生活を発展させている時には――併合国家にとってきわめて危険で有害なものとなるということを認識したからである。

たしかに、民族国家への傾向が至る所で貫徹するわけではない――我々は後に事情によってはこの傾向を妨げる諸要因を知るであろう――が、すでに民族国家になった近代国家のどこにおいても今度の戦争に到るまで多民族国家へと拡大していく傾向を発見できないのである。さらに、いかなる現代の多民族国家においても、新たな民族の併合によって抱えている民族の数を増やそうとしたり、それによって困難を拡大しようとする傾向も見出すことはできない。正反対の意味で語られているように見える事実は、ただ見かけだけのものであるか、全体傾向を無効にするにはあまりに些細なものであるか、のどちらかである。そして、この些細な逸脱も、それを敢えて行っている国家でさえいやでたまらぬのである。我々はここでは、全く異なった資本に属する植民政策は度外視している。ここでは我々は、その住民が国家の政治生活に実際に参加しているか、断固として参加することを要求しているような発達した民主主義をもつ近代国家の併合について語っているのである。

最近百年の間に併合によって拡大したヨーロッパの国はどこか。

人民投票が圧倒的多数で併合に賛成した後で、一八六〇年にサヴォアとニースを併合したフランスがある。サヴォアの言葉はフランス語であった。フランスの国境に密着している小さなニースは複数言語併用であった。

次いで、大きな征服国家ロシアがある。それはヨーロッパの大国の中で近代の傾向、とりわけ民主主義の傾向に最も長く触れずにきた国である。それにもかかわらず、この国もまた最近百年の間、より広いヨーロッパ民族の地域を自分がすでに征服した地域に付け加えることを警戒した。ヨーロッパのこの期間におけるロシアのすべての占有変更は、ベッサラビアの尖端に関わるものにすぎなかった。ロシアはほとんどすべてのベッサラビアを一八一二年に併合していた。ドナウ河口の小さな帯状の土地を、ロシアは一八二九年にさらに付け加え、一八五六年には再びルーマニアに返却しなければならなかったが、一八七八年には再びそれを取り戻した。これが一八一五年のウィーン会議以来の最近百年間に、ヨーロッパの土地の上でロシアが獲得したすべてであった。

より重要なものは、一八七八年にボスニアとヘルツェゴヴィナを「占領した」オーストリアの獲得物であった。それによっ

てオーストリアは百三十万人の人口増加をみたが、それは国家の中に新しい民族を導入するものではなく、ただ三百万人のセルボクロアチア人が増えただけであった。

これらはいずれも、きわめて些細なことであって、どこでも現存国家の一つにさえ、新しい民族を引き渡すことにはならなかった。最近百年間にヨーロッパで、すなわちイタリア、ドイツ、バルカンで起こった真に重要な国境変更と併合は、民族国家の方向への動きであり、それを越えるものではなかった。その際、北シュレスヴィッヒにおいて一五万人のデンマーク人が、ロートリンゲンにおいて約三〇万人のフランス人が併合されたとしても、それはあまり重要でない副次的現象にすぎなかった。メッツ周辺の地域は、エルザス・ロートリンゲンのほとんどのフランス人を含んでおり、まとまったフランス語地域をなしている。ビスマルクはこの地域の併合を全く望んでいなかった。それは戦略的理由から参謀本部によって彼に押しつけられたものであった。

「外国語を話す地域をドイツが入手するというあらゆる思考を、ビスマルクは単に嫌っていただけでなく、はっきりと敵対的であった。だから彼はヴェルサイユ講和においてもメッツを全く不本意にモルトケの強要により受け取ったのであった」（デリュブリック、ビスマルクの遺産、一六九ページ）。

ドイツ、イタリアおよびバルカン諸国における民族国家の形成と今述べたばかりの小さな併合――それを遂行した国家のいずれも新しい異民族を併合しなかった――以外に最近百年の間にヨーロッパの国家間生活においてなお三つの大きな変化が起こった。ここでそれを挙げてみると、一八三〇年のネーデルランドからのベルギーの分離、一八六七年のオーストリアからのハンガリーの半分離、一九〇五年のスウェーデンからのノルウェーの完全な分離である。これらは、決して一国の他国による吸収の方向に行くものではない。近代民主主義の傾向、前進する資本主義の成果は、ここではむしろ反対の方向に作用している。

資本蓄積の法則から説明されるという小国の吸収による大国の集中という現象は、それゆえ全く存在せず、説明の必要もない。現代の諸民族の生活の、あのいわゆる法則なるものによって正当化される食欲は、今次大戦の間に初めて盛んになった。前進する資本主義が必要とするものは、交通の絶えざる拡大であって、国家領域の拡大ではない。現存の関税国境を廃止する国家の拡大も、同様にこの方向に作用するものであるが、それは圧倒的な軍備を前提とする壊滅的戦争によってのみ実現されるものである。それよりもはるかに確実に、また経済生活にいかなる負担も妨害ももたらすことなく、いやそれどころか逆に生き生きとした刺激を及ぼす交通の絶えざる拡大は、関税国境を可能な限り引き下げる鉄道建設と通商条約によって実現されうる。

国家領域の絶えざる拡大なしに、このことを実現するのが、経済発展の命令である。

勿論大国による小国の吸収ではなくして、一国内部の大きな、より発達した民族による小さな、より遅れた民族の吸収は事情が違う。このことは、多くの小民族にとって避けがたく起こっていることである。だが、すべての小民族にとってではない。

小さな農業民族の非民族化の過程は、近代民主主義の運動に捉えられる段階に達した所では、強力な反対傾向を見出す。この運動と関連して、これらの民族は自身の知識階級と力強い文学を伴った自らの書き言葉を発展させる。それは単に詩の言葉となるだけでなく、散文の言葉ともなるのである。通俗文学は方言をも使うことができる。日常生活、新聞、手紙、授業、通俗科学文献に使われて初めて、書き言葉は人民大衆の言葉となり、政治的要素となり、それを使う人民大衆を近代民族にするのである。民族がひとたびこの高さに達したならば、その民族は言語の保持において信じがたい粘り強さを発揮する。

文書はいつでも長く保存できるという性格をもっている。それは過去とその産物を、長く我々の意識の中に生き生きと保つための最善の手段である。とりわけこのことを証明するのは、聖書が今日まで保持している影響力である。ある民族が自身の書き言葉を作り出した所では、それは保守的に働き、他の民族への同化を困難にする。

一八四九年にマルクスとエンゲルスが、オーストリアのスラヴ人にはバスク人やブルターニュ人と同じ運命が待っているという信念であったのは、これらのスラヴ人たちが語るに足るような文献をまだ全くもっていなかったからである。チェコ人においてさえ、大衆の書き言葉としての彼らの言語の使用はまだほんの始まりにすぎなかった。文盲であった南スラヴ人は、はるか以前の状態にあった。

今日では、事態はかなり違ったものになってきている。チェコ人と南スラヴ人は大学をもち、強力な出版物と豊かな文献をもっている。今日でもなお一八四九年の言葉を、あの時代の特徴としてでなく、我々の時代の指針として引き合いに出そうとすることは、諸関係に関する完全な無知であるか、そのような無知に基づく不遜な空論であるかのどちらかである。

混合言語国家において、ある農業民族が自分自身の書き言葉を作り出し、より強固な民族的結合の手段を獲ち得た所では、局面が一変する。工業地域へ移住する農民大衆は、今ではそこでその民族性を失う必要はない。彼らの移住が十分強力であれば、彼らは工業地域の伝来の言語をますます駆逐し、遂には彼らの言語をそこで支配的なものにすることができる。これが今日ベーメンやメーレンの都市で起こっている過程である。

勿論この過程は、異民族の流入が密集して圧倒的である所でのみ起こる。チェコ人のウィーンへの流入、ポーランド人のルール地方への流入では、この地域のドイツ的性格を揺り動かすことはできない。スラヴ人の流入が今日、読み書きができ、自分たちの出版物や文学をもっている大衆によってなされているという事実は、彼らの吸収をそこで単に遅らせることができるだ

けにすぎない。古い世代は、まだいくぶんか自分たちの言葉を忠実に保持しているが、その土地で生まれ、教育を受けた新しい世代は、土地の言葉を話し、移住者の言葉を話さない。

この不可避的な過程を妨害するものはすべて、有害な作用を及ぼす。移住者の吸収の遅延、彼らの土地の言葉の習得の遅延は、その土地のさまざまな民族の労働者が、お互いに意思疎通し合い、共同して階級闘争を行うのを困難にする。

農業住民が文盲状態を脱し、自民族の書き言葉の使用に到達している所では、言語境界の変化は最も小さい。農業経済の保守的な作用は、そこで文書の保守的作用によって高められる。このような条件の下におかれると、民族は特に強靭なものとなる。かくして、ドイツ帝国においては、今まで北シュレスウッヒ、ロートリンゲン、東ポーゼンでドイツ語を民衆の言葉にすることができなかったのである。

民族の拡大は、不変の何かではなく、きわめて変わりやすいものである、と人は見ている。単に自然の増殖条件だけでなく、歴史の過程の中で絶えず変化する経済的、政治的条件もまた、その拡大に最も深い所で影響を及ぼしているのである。

より大きい、より新しい国家のいずれも、近代的生産様式と民主主義の勃興の時代には、きわめて異なった言葉を話すさまざまな民族から成り立っている。これらの分子の一部は、国家の中で数において、また経済的、政治的実力において優っている言語共同体によって同化され、その中に解消させられてしまうのである。だが、他の部分においては、このことは成功しない。前者の過程が成功すればするほど、国家は民族国家の典型に近づく。この過程が作用することが少なければ少ないほど、ますます明らかに国家は多民族国家の形態を帯びることになる。古い資本主義国家においては、前者の形態が優勢である。そこにおいては、近代民主主義が登場する以前に、大衆教育が小民族においてもまた大衆の書き言葉と文学のための基盤を作り出す以前に、近代国家と近代生産様式の同化傾向が作用することができたのであった。資本主義的生産様式が遅れて発展した国においては、近代的民主主義の傾向の多くがすでにその内部で作用しているので、被支配民族の支配民族への同化による民族国家の形成は困難なものとなる。たしかに、この過程はそこでもまた起こっている。ロシアが数えることのできる一四二の民族のうち、すべてが近代民族へと発展できるわけではない。多くは、ソルブ人やバスク人の道を行くであろう。オセット人、ウォグレン人、チェレミッセン人、カルムク人、サモイェーデ人、等々もそうである。だが、一連の民族はすでに近代民族へと発展したし、他の民族もその後に従うだろう。

近代民族が形成された所ではどこでも、彼らは猛烈に自決権を要求し、それには民衆語の政治言語、すなわち国家語への昇格も含まれる。上昇しつつある民族が、自分たちがその中で成長してきた国家を民族国家に転換することができない時、彼らは独立した民族として独立国家を形成するために、自らが所属

する国家を粉砕するか、そこから離れようとする。

五、国家の民族への適応による近代民族国家の形成

さまざまな民族分子からの一民族国家の形成というこれまで見てきた方法は、ゆっくりとした漸進的な形成の方法である。たとえ、その範囲が不変のままにとどまるか、少なくともこの過程によって変えられることのない所与の国家の領域内での諸民族の変化が、いつでも平和的なものとはかぎらぬとしても、そうである。これは内的な政治と経済の過程である。さまざまな民族が一つの共通の国家の中で対立しており、そのうちのいずれも他方を吸収することができず、そのうちのいずれも人民大衆の強力な政治生活を発展させており、いずれもが自分たちに役立つ国家を求めて突進している所では、事態は全く異なっている。我々はすでに、この闘争によって民族内部の階級対立が、どれほど容易に民族対立によって撃退されてしまうものであるかについて言及した。

ある民族がそのような諸条件の下にあり、とくに少数で、その立場が所与の国家の中で希望のないものに思われる時には、彼らは国家を改造するのではなく、転覆させること、あるいは少なくとも国境の変更によってその国家から離れることに努めるであろう。

この過程の目標は、漸進的な改造によってではなく、国家の突然の大破局、すなわち革命か戦争によってのみ実現されるのである。

人は社会を一つの有機体とみなした。したがって、人は国家を一つのメカニズムとみなすことができよう。国家は社会よりもはるかに固定的なものである。社会は自然法則の力をもって作用し、実際に自然、すなわち人情から発する法則によって支配されている。

それに対して、国家は権力者――君主であれ、貴族であれ、人民大衆の組織であれ――によって一定の目的のために意識的にその住民に課せられた法律によって規制されている。社会はほとんど全く気付かれずに進行する絶えざる変化の内にある。社会的諸条件とともに、社会法則もまた変化する。人情はその本質に照応したやり方で、あらゆる刺激に反応する。刺激が変わるか、刺激の作用する諸条件が変わると、必然的に自ずから人間に対するその作用も変わる。それに対し、国家の法律は、明確に修正されたり、破棄されたりしないかぎり、同じものにとどまる。勿論その作用や貫徹の程度が、社会的諸関係の変動に無関係であるわけはない。だが、国家の法律そのものは、権力者がそれらの法律に利害をもっている時には、いやそれどころか習慣や無知からでさえ、これらの法律が作られ、その目的をかなえていた社会的諸条件がなくなってしまった後も、存続し続けるのである。かくして、周知のように法律と権利は、永遠の病のように遺伝するのである。国家の法と社会の法則は、相互にますます鋭い対立に陥り、国家的大破局が再び両者を一

致させるまではいつまでもそうなのである。

しかし、内的構造よりもより固定しているのは、国家の範囲である。国家の内的生活においては破局は可能である。だが、国家を変化した諸条件に適応させるためには、どんなことがあっても破局が不可避であるというわけではない。ここでは、暴力的破局は例外であり、通常見られるのは国家の所与の基盤の上で相互に闘っている階級、政党、徒党の間の権力移動の結果としての個々の法律の変更なのである。

この基盤を完全に保持することが、搾取に関与し、その分け前にあずかることを望む国内のすべての階級の共通の利益である。この共通の利益、そのかぎりで民族の利益、すなわち全階級の利益は、国家領域のどのような削減にも抵抗する。

ここにもまた、国家と社会の間の本質的な違いが示されている。社会の範囲を確定することが、いつでも可能なわけではない。社会は、相互に継続的で必然的な関係にある人間の総体を意味する。この総体の大きさは、経済的諸条件、とりわけ交通の諸条件とともに変化する。共同体が完全に孤立して生きている所では、社会はこの共同体と同じ大きさである。それに対し、資本主義的生産様式においては、社会と人類とを同概念にしようとする傾向がある。社会の範囲は、この二つの極端の間のさまざまに異なった大きさをとりうるのである。たとえば、古代社会は地中海周辺の地域を含んでいた。勿論アメリカ、オーストラリア、東アジア、サハラ以南のアフリカ、ヨーロッパ北部はここには含まれていなかった。この領域の内部で、古代社会の境界を正確に確定することは不可能であった。社会の境界は議論されうる問題ではなく、それが拡大したとしても、全く気付かれずに起こった。

国家の境界に関しては、事態は全く異なっている。それは明確に境界付けられ、その支配者や支配者になることを望む人々によって、彼らの共通の財産として、彼らのいずれによっても自分自身の財産を管理するのと同程度の熱心さで管理されるのである。この財産の減少に対しては、これらすべての層が抵抗する。それはただ暴力によってのみ成し遂げられる。

国家の内的構造にとっては、平和的な細目にわたる立法による漸進的な変革の道が通例であり、暴力的な破局が例外であるとすれば、国家の領域の変更は、今までほとんどもっぱら暴力的方法によって、反乱や戦争によってのみ可能であった。ここでは破局が規範となっている。

それからの逸脱は、せいぜい国家が一つあるいは二、三の階級の所有ではなく、人民の一部もその統治に関与せず、期待もしていない所で、国家が一つの家族、一王朝の私有財産となっており、随意に処分することができ、国家全体あるいはその一部を相続財産として、持参金として、代金として、抵当として、他の家族に引き渡すことができる所でのみ起こりうる。このような段階にあっては、国境は絶えず変化しており、戦争がその変化の唯一の原因ではない。だが、そうはいってもその主たる

原因は、ここでもやはり戦争である。そして、絶対主義のこの段階は、歴史における一時的な、短い現象にすぎないのである。

したがって、現存の多民族国家から新しい民族国家を形成することは、暴力の方法によってのみ可能であったし、今でもそうである。これは暴力的革命の形態、すなわち抑圧され、引き離された民族の、自分たちを抑圧し、その統一を妨げる国家権力に対する暴力的反乱の形態をとる。国家的転覆を成就するための第二の可能な暴力の形態は、当該民族の解放と統一に関心をもっている現存国家権力とそれに反対する国家権力との戦争の形態である。

多民族国家創出の革命的方法が、ブルジョア階級が革命的であることをやめたがゆえにますます挫折しているということを、すでに我々は見てきた。プロレタリアの階級闘争は、プロレタリアートと民族の所有階級との持続的な協力関係を終わりにし、民族闘争の指導のために民族の搾取階級の下にプロレタリアートが進んで服従するという状態も終わりにした。搾取階級自身は、今日では彼らの経済的支配を侵害しない民族的抑圧の状態を、民族的には解放されるかもしれないが、経済的に強制収用されるおそれのある革命の状態よりはましだと考えているのである。

かくして、二つの側面から、革命は現存社会秩序内での民族解放の手段としての意義を失った。それだけ一時的に二、三の権力者の戦争が、多くの民族の解放の手段として注目されるようになった。前世紀に初めて民族解放者として振る舞ったナポレオン一世以来、王朝の戦争においては、諸民族は概して愚弄された者であって、民族解放の約束によって道具として使われてきたのである。いかなる場合にも、それは諸民族のための手段であり、諸民族に向かって吹聴されるが、最高に不確かで、両刃の剣なのである。

しかし、政治状況のこのような姿が、完全な民族国家の形成が出会うところの唯一の障害ではない。他の障害は経済的必然性から生ずる。

民族国家は民主主義的観点からすれば、たしかに最も完全な近代国家の形態であり、人民大衆が最も容易に政治的に自己を主張しうる制度である。なぜなら、そこにおいては人民大衆の全員が国語、すなわち政治生活、政治的インフォーメイションとアジテーションの言語を自由にしうるからである。ところが、近代国家は単に政治的必要だけでなく、経済的必要にも対応しうる形態を持たねばならない。そして、この両者が衝突する所では、容易に政治的、民主主義的必要の方が窮地に陥る。ここでもまた、我々は再び近代的生産様式と共に登場し、近代国家と近代的民族を作り出した要因、すなわち交通を思い出さねばならない。

近代国家は、一つの経済単位を成さなければならないと主張することはナンセンスである。いかなる国家も、そのような単位ではない。しかし、国家は、我々がすでに一度見たように、

交通単位を成さねばならず、しかもその国境の内部では個々の部分相互間の交通が外国との交通よりもはるかに容易であるという意味においてそうでなければならないのである。このことは関税国境による外国の締め出しという方法で、他方ではすべての国内関税の撤廃と交通網――道路、運河、鉄道――の整備によって達成されるのである。そのような交通単位を作りあげることは、明らかに国家領域のすべての部分を空間的に結合した時にのみ可能である。

封建国家はそのような結合を必要としなかった。封建国家の個々の領域は、経済的に相互に独立しており、本質的には自足していた。封建領主は、統治権をさまざまな地方に分散して持つことができた。ハプスブルク家は一九世紀に到るまで、バーデンとヴュルテンベルクに領地を持っていたし、ホーエンツォレルン家はスイスに持っていた。近代国家では、このようなことは全く不可能である。

交通の必要と手を携えて、それと密接に結びついた用兵の必要が現れる。同じ条件の下では、より大きな軍隊がいつでもよりよいチャンスをもっている。ところで、軍隊の拡大は交通手段の状態によって条件づけられている。交通手段が完全になればなるほど、軍隊はそれだけ大きくなりうるし、それだけ大きな軍勢を素早く一点に集中することができ、それだけ長く軍隊を纏めておくことができ、食料や軍需品を供給することができるのである。中世の軍隊は小規模なものであり、鈍重で、長く纏めておくことができなかった。これに対し、個々の城や町は、援軍が被包囲者の救援に来ない時でも自らを守ることができた。急速に大きな軍勢を国中至る所から集めることができるように、国家を形作る必要は当時はまだ存在しなかった。これに反して、近代の用兵においては、この必要がますます増大し、国境の画定に際しても同じ方向に作用する――たとえいつでも経済的必要と同じ方法ではないにしても。

我々の時代における用兵と交通の必要が、一つの纏まった国家領域への衝動を生み出した。しかし、言語や民族の領域は、決していつでも一つに纏まっているとはかぎらない。民族大移動の時代以来、なるほどヨーロッパには、全民族の移動はもはや起こってはいない。しかし、少数の民族部分の移動は繰り返し起こってきたし、今も起こっている。今日では、それはたいてい都市への移住であり、そこで移住者たちは、たとえ外国語を話していても、容易に同化されるのである。以前の数百年にわたって、移住者の多くは農民であり、定住した新しい土地で農民として自身の経済生活を続け、もともとの言語を保持し続けたのであった。かくして、我々はヨーロッパのさまざまな国の中に、しかも東に行けば行くほど言語の島を見い出すのである。つまり、そこの住民が、周囲のより大きな地域の住民とは異なった言語を話しているのである。他方、言語領域の境界はいつでも厳密に引かれうるわけではない。さまざまな民族の住民が、多くの地方において、この領域がどの民族に所属するか

を確定することが困難なほど、入り乱れて住んでいる。

それゆえ、民族国家の創設は、同じ民族が住んでいるすべての地域を一つの国家に編入するという方向へは進みえないのである。熱望していたドイツ民族国家のために国境を十分広く引くことのできなかった人々もまた、ジーベンビュルゲンをザクセンとともにドイツ民族国家のために要求しようとは考えなかった。民族国家においては、纏まった言語領域のみが問題となる。すべての生活力ある民族は、そのような領域に住んでいる。そのような領域の境界にある混合言語地域の分割に際しては、相互互譲の精神が不可欠となろう。かくして、たとえば『新ライン新聞』（マルクスあるいはエンゲルス）は、一八四九年八月に、ドイツがポーゼンのためにポーランドと協議することを要求したのであった。

「ポーランドの復興とドイツとの国境の調整は、単に必要であるばかりではない。それは東ヨーロッパの革命以来現れてきたあらゆる政治問題の中で、最も容易に解決可能な問題である…。国境において、特に海岸地方において、ドイツ人とポーランド人が入り乱れて住んでいるので、ふたつの部分は相互にいくらか譲歩しなければならないということ、多くのドイツ人がポーランド的になり、多くのポーランド人がドイツ的にならねばならないということは、自明のことであり、いかなる困難もないであろう」。

だが、困難はまさにこの「相互の譲歩」を引き出すことにこそある。民族国家創設の際のもう一つの困難は、言語国境と一致しない自然の国境が存在する所で生ずる。関税国境によって初めて外国から切り離されたわけではなく、また人為的な交通路によって初めて結び付けられたわけでもなく、乗り越えることの困難な自然の国境によって囲まれており、その内部では自然の交通路、たとえば谷とその流域の水路が迅速な内的交通手段となっているような自然の交通単位をなしている領域がある。そのような領域は、国家の自然の基盤をなしており、たとえいくつかの民族が住んでいるとしても、別の国家に分割することは困難である。

勿論自然の国境と交通路について、それらが自然によって変更不可能なものとして与えられているという意味で語ることはできない。それはむしろ技術や経済の高さ、およびそれらが作用しているかどうか、どのような方法で作用しているかによるのである。文化の始まりにおいては、深い森は二つの隣接した民族の間の交通の強大な障害物であり、彼らの間の自然の境界をなしていた。今日の文化国家においては、もはやそんなことはない。川幅の広い、深い流れは、ある時は引き離すように、他の時は結合するように作用する。山脈もまた、交通の絶対的障害物ではない。

技術の巨大な展開を伴う資本主義の時代には、自然の国境は目立って重要性を失っている。だが、それは我々の時代にもまだ作用しており、すでにそれが作り出し、民衆の必要にとって

も、彼らの自決にとってもどうでもよいものではなくなっている歴史的条件と伝統という形で作用しているのである。

我々は他の機会にそのための具体的実例を提供するつもりであるが、さしあたり次のことだけに注意しておこう。つまり、国境形成に対する自然的条件の影響は無視すべきでもないが、さりとて過大評価すべきでもないということである。地理的要因の名の下に今日多くの不正がなされている。すなわち王朝的家族政治あるいは一八一五年のウィーン会議が作り出した多くの国家的創造物は、自然的必要の産物と主張された。それは近代自然科学を社会的、政治的権力者の必要に奉仕させようとする試みと同じである。それはちょうど戦争や植民政策をダーウィン主義者流に、自然的必然として説明しようとする試みと同じである。

たとえばオーストリア君主国を自然の交通単位とみなし、ガリツィア、ボスニア、ブコヴィナ、トレンティノが、関税国境の外にある最も近い隣人と交通によって結びつくよりも、自然によってより強く相互に結びついていると考えることはナンセンスである。

今日の生産様式の下においても、国境確定の自然的条件はきわめて多様であり、ほとんどの場合決定的でないとしても、あらゆる近代国家は一つの自然的必要、すなわち大洋への通路の必要をもっている。この必要は封建国家には存在しなかったが、資本主義国家にとっては緊急に必要なものとなった。資本主義国家にとっては、世界貿易への参加は贅沢ではなくして、死活問題であるからである。大洋は、少なくとも平和時においては、あらゆる国家にとっての自由な通路であり、他の何人にも閉鎖されることはない。これに対して、海に接していない国は、いつでも――平和時においてさえ――隣国の交通政策に、単に関税政策だけでなく、交通政策、すなわち鉄道や運河の施設の様子、運賃率等々に依拠している。このような依存は、国家の経済生活にとってしばしばまさしく致命的なものとなる。多くの民族は、すでにこのような理由から大多民族国家の中に住むことの方を選ぶであろう。海から遮断された自分自身の民族国家を作るよりも、大洋への自由な通路をもつ方がよいからである。他方で、国家は――民族国家であっても――それが海への通路を手に入れるたった一つの方法であれば、他民族の住んでいる地域を占領することもためらいはしないであろう。すでに一つの海港をもっているが、この一つしかないという国は、あらゆる手段を用いてそれを守ろうとするであろう。たとえそれが民族性原理の侵害によってのみ可能であるとしても。

国際民主主義の見地からさえも、そのような場合にいくつかの港町に自決の原則を適用することが適切なことだとはみなさないであろう。全体は部分よりも重要である。そして、数千人の人々の民族的希望のために何百万人もの人々の経済生活が拘束されるわけにはいかない。

民族国家創設のこれらの自然的障害に加えて、すでに見たよ

うに、なお歴史的、伝統的障害がある。これらの障害は、自然的障害と同様に考察されるべきであり、個々の場合について研究されるべきである。たとえそれらが、ほとんどの自然的障害と同じく資本主義発展の過程で克服される傾向を持っているとしても。だが、残念ながら伝統は我々革命家が考えているよりもはるかに強力で、深い根を持っており、すでに我々に多くの不愉快な驚きをもたらしているのである。

民族、すなわち言語共同体から独立して、近代民族の登場以前に、人々を分離させたり、結合させたりする諸要因の中では、とりわけ宗教が大きな役割を演じている。宗教は東ヨーロッパにおいては最近まで、オリエントでは現在でも民族よりも強力であり、西ヨーロッパでもあちこちで一定の役割を演じている。

血縁に基づく古い種族組織が解体した後で、未だ交通の増大が近代民族を作り出す以前の時代には、教会組織が人民大衆を結び付ける最も強力な絆であり、発展途上の段階でほとんどが緩やかで一時的な性格を持つにすぎなかった国家組織などよりもはるかに永続的な絆であった。外国の征服者が侵入し、土着の人々を抑圧している所では、土着民にはしばしば教会組織のみが支柱として残っている。それなしには、彼らは完全に抵抗力のないものなってしまったであろう。それゆえ、彼らは極端な粘り強さをもって、しばしば抵抗に立腹した征服者の狂信に対抗しうるほどの凶暴な狂信をもって、この支柱にしがみついた。

一定の歴史的諸条件――勿論それは今日では一定の後進性を意味している――の下では、宗教は多民族国家の中で強力な接着剤となっている。かくして、ハプスブルク多民族国家は、国民の五分の四が所属しているカソリック教会の力に負うところが少なくないのである。

後進性に起因するものでない、他の種類の多民族国家の紐帯がある。多民族国家が、その住民に隣国においては見出しえないような利益を提供している所では、その住民は、たとえ隣国が自分自身の民族国家を持っておろうとも、多民族国家に結びついているであろう。民主主義と民兵制度が、フランス人、ドイツ人、イタリア人をスイスに結集させ、そこに決してイレデンダ〔民族統一党〕を登場させないのである。

それと並んで、勿論一つの民族のみに与えられ、この民族の成員に対してのみ、民族国家よりも所与の国家の方を選択させる動機を与える多民族国家の利点というものも存在する。

たとえばオーストリアにおいて、ドイツ人のイレデンダ、すなわちドイツ帝国内の民族同胞との国家的統一を求めるドイツ人の渇望は、もし彼らが自分たちが国家の中の支配民族であるという感情を持っていたならば、有力になることはないであろう。これに対し、スラヴ人の優位が確立しそうに思われる時には、この渇望はきわめて強力に膨脹するであろう。チェコ人にあっては、反対である。スラヴ人の方向を向いたオーストリアにおいては、彼らは最も熱心な多民族国家の支持者である。民

族国家の思想は、彼らの間にあっては、多民族国家がドイツ人によって支配されているように見える時にのみ、支持者を見出すのである。

すべてのこれらの諸要因――言語領域の分裂、言語の島、諸民族の境界での言語の混淆、言語の国境と自然の国境のくい違い、大洋への自由な通路の必要性、宗教と政治の歴史的に与えられた諸条件――すべてのこれらの諸要因は、多くの地方で多くの時代に民族国家実現の傾向に対して、住民自体の中に重大な障害を作り出す。近代的交通およびそれとともに発生した近代民主主義と緊密に結びついている民族的独立への努力は、それによって弱められることはないが、どこでも民族国家のための努力という形をとるとはかぎらない。

我々がヨーロッパの言語地図を手に入れ、そこに記入されている言語領域が、それと同じ数だけの民族国家に変えられるべきであると結論づけるという形で、近代の民族的衝動を考えることはナンセンスである。国家の旧来の権力関係の中に存在する外的な障害を度外視しても、この種の決議はこの方法で解放されるはずの多くの民族国家自体の抗議に、あるいは少なくともその領域や階級のいくらかの人々の抗議に出会うであろう。

それゆえ、国際社会民主主義は民族自決の原則から、民族国家がこの原則を実現するための唯一の形態であるという結論を引き出すことはできない。実際的な具体化においてだけでなく、綱領の項目としても、一定の諸関係のためには民族国家と並んで、多民族国家の枠内における単なる民族自治も無視されるべきではない。他面では人は少なくとも長期にわたって、多くの民族国家においてさえも言語の島や民族的少数者と関わりを持たなければならないであろう。民族的少数者は民族的抑圧、すなわち自分たちが用いている言語の使用を暴力的に妨害されたり、自分たちの言語共同体への所属のゆえに国内での権利を縮小されたりすることに対して自分たちを守ろうとする。

それに対し、単なる事実の力によって自ずから少数者を周囲に民族的に同化させるすべての経済的、社会的要因から人為的手段によって民族的少数者を守ろうとすることは、極度に反動的な企てである。

我々は民族的少数者の抑圧に反対しなくてはならない。なんとなれば、我々は社会主義者、民主主義者として、国家や社会の人民層に対するあらゆる抑圧に反対しなくてはならないからである。たとえば我々が宗教共同体に対するあらゆる抑圧を拒否しなければならないように。しかし、我々はそれによって宗教が民衆の意識の中で拠り所を失い、消滅するのを阻止しようとしないように、二つの民族を隔てる言語の相違が消滅するのも阻止しようとはしないのである。民族性に対する利害からではなく、民主主義に対する利害から、我々は民族的少数者に対するあらゆる抑圧に反対するのである。

六、オットー・バウアーの民族理論

民族に対する我々の関心は、民族的権利の保持が民主主義の保持と結びついているかぎりでのみ存在するという思想は、単に民族主義者の側から異議申し立てされるだけではない。国際社会民主主義の陣営にいたるまで、民族は最高の社会的聖地であり、それに対してはすべての人が変わらぬ忠誠を誓うべきであるという信念が浸透している。民族を裏切ることは、父や母との縁を断つのに劣らず軽蔑すべき、非難すべきことであるというのだ。なるほど国際性は、民族の同権、いやそれどころか民族の連帯、あるいは少なくとも労働する階級の連帯を認めるものであるが、しかし決して各人の民族への所属について無関心なわけではない。

民族的同化に対するこのような拒否は、我々の時代の最も重要なマルクス主義者の見解の中に、すなわちオットー・バウアーが『民族問題と社会民主主義』（ウィーン、一九〇七）と題する本の中で表明した見解の中に支柱を見出しうると信じている。この本は、バウアーの書いた全ての本と同様卓越したものであって、民族問題について知ろうとする者は誰でも、この本を無視することはできない。特にオーストリアの民族問題について、この本は豊かな知識を提供している。だが、この本の出発点に、私は同意することができない。私はこの本の出版後すぐに、私の疑念を私の書評『民族性と国際性』（『ノイエ・ツァイト』第一付録、一九〇八年一月一八日）の中で詳述した。戦争目的を定式化するに際して、民族の概念や民族政策の観念が社会民主党に対して持っている意味を検討すべき事態に直面して、私は民族自決に関する私の原則的説明を終える前に、ここでもう一度この問題に立ち戻ってみなくてはならない。

私は民族を言語共同体として把握し、近代民族を近代の交通によって生み出された書き言葉の共同体として把握する。民族の意味は私にとっては、社会生活、したがってまた政治生活、特に民主主義にとっての人民大衆の言語の重要性の中にある。

バウアーは民族を言語共同体とみなすことを拒否する。同じ言葉を話しているが、違う民族だと感じているイギリス人とアイルランド人、クロアチア人とセルビア人の実例は、彼が引き合いに出しているものであるが、首肯させるに足るものではない。ここかしこに、言語共同体が民族共同体として現れるのを困難にする歴史的に伝えられた分割原因がある。これらの古い伝統が消滅していくのにつれて、言語共同体がますます民族共同体として感じられるようになる。我々はそれについてもう一度特別に論ずるであろう。言語共同体を成していないにもかかわらず、一つの民族であるとバウアーのいうユダヤ人についても同様に論ずるつもりである。彼はそれらが近代民族であるとはいわない。彼の出発点は、私のそれとは全面的に異なっている。彼は近代民族の概念ではなく、民族一般の概念を求めているのである。

バウアーにとっては、民族とは「運命共同体から生ずる性格

共同体」（一一三ページ）である。そのようなものとして、民族は彼にとってはまた文化共同体でもある。各々の民族はそれぞれ独自の文化を体現する。人は「民族的文化共同体」を上昇することによってのみ文化人となる。

「労働者階級は、自分たちの闘争の成果がどれほど大きなものであろうとも、資本主義社会では決して民族文化の完全な所有に到達することはできないことを知っている。社会主義社会が初めて、民族文化を全人民の所有にし、それによって全人民を民族にするであろう。それゆえ、すべての進化的―民族政策は、必然的に社会主義政策である」（一六四ページ）。

ところで、「進化的―民族」政策とは何か？　その概念を示すのが次のような叙述である。

「全人民を民族文化共同体に参加させ、民族文化によって規定し、かくして民族的性格共同体へと結びつけようとする目標への計画的共同作業もまた、おそらく民族政策と呼んでもよいであろう。それを（民族の伝統的特質を不変のまま保持しようとする）保守的―民族政策から区別するために、私はそれを進化的―民族政策と呼ぶ。これが進化的と呼ばれるのは、歴史的に発生してきた民族の特質の変わることなき保持が我々の任務だという考えと絶縁し、この誤った考えに対して民族的性格の発展、進化という考えを対置しているからである」（一六〇ページ）。

だが、この発展はバウアーの見解によれば、決してさまざまな民族の特質の一層の接近を意味するものではなく、むしろその反対である。

「社会主義が民族を自治的なものにし、その運命を民族の自覚した意志の産物にするという事実は、社会主義社会における民族の分化の増大をもたらし、その特質を一層鋭く刻印し、その性格を相互に一層鋭く分けることになる」（一〇五ページ）。

「全人民の民族文化共同体への編入、民族による完全な自決の獲得、民族の分化の増大――これが社会主義を意味する」（一〇八ページ）。

このように、バウアーにあっては、社会主義は民族性の最も鋭い強調と最も緊密に結びついている。ここから、それを言葉通り受け取った時には、この思考過程には矛盾しないであろうが、バウアー自身が拒否するであろうような多くの結論が引き出される。

さしあたり、上述の三点のうちの第二点、すなわちここで与えられたバウアーの定義によれば、社会主義とは「民族による完全な自決の獲得」を意味するという点について考えてみよう。

「社会主義は民族に自治、すなわち文化の一層の発展のための自決を与える」（一〇三ページ）。

このことは、経済生活の調整が社会主義においては、「組織された社会の意識的な行為となることによって実現される。…民族の性格への作用、この性格の変化の規定を社会は再び引き受ける。人民の未来の歴史が、その自覚的な意志の産物となる。

未来の民族は、商品生産社会の民族が決してできなかったこと、すなわち自ら教育し、その運命を自ら組み立てることができるようになるであろう」（一〇五ページ）。

ここで民族は社会と同等のものとみなされることによってのみ、社会主義と必然的な関連におかれている。本当は、民族は近代社会の一部をなすにすぎない。勿論これまで社会自身もプロレタリアートが我が物とし、社会主義生産の目的のために奉仕させうるような機関を意のままにしたことはなかった。だが、民族にもそのような機関は、社会に劣らず欠けている。国家権力は、資本主義的生産の代わりに社会的生産をおくことのできる力を排他的に所有している大きな権力である。それゆえ、バウアーがここで国民について言っていることは、決して民族と同等のものではない国家についても当てはまる。だが、その際にも個々の国家は全く随意に行動できるわけではない。世界経済は、個々の国家を最も緊密な経済的依存関係の中においてきた。なおそれを疑っている人には、今や世界戦争が最も印象的にそのことを教え込む。相互の経済的依存に、政治的依存が照応する。プロレタリアートによる政治権力の奪取というような事件は、近代文明の全国家世界が最大の動揺に陥り、うまくいった実例に従うということなしには、一国の中では起こりえないものである。すでに一八四八年において、革命は国際的現象であった。一方、今日すでにプロレタリアートの階級闘争は、国際的基盤の上においてのみ成功裡に遂行されうる。それは必然的に国際組織を生み出し、この組織はプロレタリアートが勝利する日まで、ますますその力と安定性を増すことであろう。

かくして、生産の社会主義的組織化は、たとえ個々の国家の暴力を出発点とするものであっても、初めから国際主義的性格を帯びていることになる。それは「組織された社会の意識的行為」として、孤立した国家の行為ではなく、ましていわんや孤立した民族の行為などではありえず、文明世界の合衆国の行為となるであろう。そのかぎりで、社会主義は個々の国家の主権と「民族の完全な自決」の問題を終わりにするであろう。我々は、この自決を人民を支配している権力者に対してと同様、他民族に対する個々の民族の関係に対しても要求する。社会主義は個人の平等と同じく民族の平等を要求し、他の個人によるある個人に対する隷属と搾取と闘うように、他の民族によるある民族に対する隷属と搾取とも闘わなければならないのである。しかし、このことは、社会主義が社会に対する個人の完全な自決を宣言するということを決して意味しない。このことは、民族についても同様に当てはまる。

バウアーが、ここで詳述された関連で自決について語っていることは、民族には当てはまらず、一部は社会に、一部は国家に当てはまる。

このことがすでに奇異な感じを与えるとすれば、社会主義が民族にもたらす結末についての彼の叙述の三つの点のうちの第三点に対する論証は一層そうである。民族の分化、すなわち差

異の増大という点である。彼自身この見解は人を驚かすだろうと述べている。実際一般には、諸民族間の交通の増大は民族の特質をますますすり減らすと推測されている。この事実はすでにずっと以前から、世界市場と結びついている地域の至る所で確認されている。しかし、世界がますます単調になってしまうという理由で、このことはいつも喜んでではなく、しばしば不快と懸念をもって認められているのである。バウアー自身も認めている。

「さまざまな民族文化の物質的分化内容が、社会主義社会において平均化されるであろうということは、確かである。…近代資本主義は、民族に相互に学ぶことを教えた。あらゆる技術的進歩は、数年のうちに全世界の財産となり、法律のあらゆる変化は、隣の民族によって学ばれ、模倣される。科学や芸術のあらゆる潮流は、全世界の文化民族に影響を与える。社会主義が、我々の文化のこのコスモポリタン的傾向をとてつもなく高めるであろうことには、全く疑問の余地がない」。

だが、それでは一体どこから民族の分化の増大が出てくるのか。このことは、民族の精神的存在、つまり物質文化とは全く違った道を進む精神文化に当てはまるというのだ。

見かけとも我々の理論的思考とも鋭く対立するこのような推論の正しさを、我々に得心させるためには、非常に強力な証明が必要である。

その証明をバウアーは、イギリス人の保守的性格から引き出している。この性格の原因の一つを、彼は「古いイギリスの民主主義」の中に見る。絶対主義と比べて、民主主義は保守的であるというのだ。

「専制君主は、短期間のうちに新しい思想を国中に広めることができる。今日の彼の気まぐれは、明日には国中のすべてのお城の流行となる。今日の彼の意志は、明日には国中で法律となる。民主主義国では、全く違う。新しいものはすべての国民を獲得し、彼らによって採用され、習得された時にのみ民主主義国を手に入れることができる。数百万の個人の意志を通じてのみ、それは国の全体意志となる――確かに、きわめてゆっくりとした前進の道であるが、比べようもなく確実な道である…」。

このことは、当然のことながら社会主義にますます当てはまる。

「新しい思想は、社会主義的民族教育によって高度に発展し、民族文化を完全に習得するに到った人物たちによって教育された人民同胞のすべてを獲得しようと試みる以外の方法によっては、社会主義社会を獲得することはできないであろう。このことは、新しい思想は簡単に採用されるものではなく、受け入れられ、数百万の個人の精神的存在と一体化させられ、適合させられなければならない、ということを意味している。いかなる個人も、新しいものを単に機械的にその精神的存在に編入せず、摂取し、その人格に適合させ、精神的に消化し、統覚するように、民族全体もまた、新しいものを簡単に受け入れるのではな

く、その採用に際しては、それを加工し、その存在に適合させ、数百万の人々の受容の過程で変化させるのである。民族的統覚というこの大きな事実によって、ある民族が他の民族から受け取るあらゆる思想は、受容される前に、民族の全存在にまずは適合させられ、それによって変化させられなければならない。…それゆえ、民族文化共同体の自治は、必然的に民族の物質的文化内容の均質化にもかかわらず、精神文化の差異の一層の増大を意味するのである」（一〇六―一〇八ページ）。

我々はさしあたり、民主主義と社会主義の作用がここで全く異論の余地なく提示されていると仮定してみよう。その場合でも、そこから依然として「民族の精神文化の差異の一層の増大」の必然性は出てこない。そこから明らかになることはせいぜい、社会主義においては交通の増大から生ずる民族的差異の均質化は、よりゆっくりとしたものになるであろう、この過程は今日の社会におけるよりもよりゆっくりと進むであろうということだけである。だが、このことは、この過程が逆の方向に進むということを意味するものではない。あらゆる外来の思想は、民族的特性に合致した時にのみ採用され、加工されるという事実は、この特性を他の民族のそれからますます遠ざけるという意味で一層発展させるということを意味するものではない。民主主義と社会主義（革命的原理を意味する今日の社会主義ではなく、未来の社会主義社会において）の保守的性格からは、精神文化における民族的特性の保持は出てくるかもしれないが、差異化は決して出てこない。

だが、なぜ民主主義が特別に保守的であるというのか。バウアーはそのための証拠をただ一つだけ提出している。古い民主主義をもったイギリスという証拠を。だが、イギリスではいつでもその思想が保守的だったのだろうか。宗教改革にいたるまで、イギリスはこの点で他の国と異なる所はなかった。宗教改革とクロンウェル革命の時代まで、イギリスは大胆な改革的精神において他のいかなる民族にも優っていた。したがって、その保守的性格は「古い民主主義」に由来するものではなく、特別なより新しい原因によるものである。私はその原因を、イギリスがここでは詳細に述べることのできない一連の諸条件によって、他の国々よりも早く、教会や封建制が完全に破産する以前に、ブルジョア革命に到達したという事実に求める。それゆえ、革命は不徹底なものになり、一つの妥協に終わり、それ以来妥協がイギリス政治の通例となった。その際ブルジョアジーもまた、封建的、教会的思考形式がまだ天下の人心を支配していた時代に早くも、支配的、保守的階級の陣営に登場したのであった。

民主主義の保守的性格について、イギリスはいかなる証拠も提出するものではない。

そこでバウアーは、なぜ民主主義が保守的であり、またそうあらねばならないのかについての理論的説明を与えようと試みる。ここで我々は、驚くべき論証全体の最も驚くべき部分に行

き着く。バウアーの言葉をもう一度繰り返そう。

「専制君主は、短時間のうちに新しい思想を国中に広めることができる。今日の彼の気まぐれは、明日には国中のすべてのお城の流行となる。今日の彼の意志は、明日には国中で法律となる。民主主義国では、全く違う。新しいものはすべての国民を獲得し、彼らによって採用され、習得された時にのみ民主主義国を手に入れることができる。数百万の個人の意志を通じてのみ、それは国の全体意志となる――確かに、きわめてゆっくりとした前進の道である」。

いや、これは決して確かではない。勿論、新しいものが数百万の人々に一人ずつ順番に近づき、最後の一人に到達した時初めて確かな地歩を占めるとするならば、民主主義の道はきわめてゆっくりとしたものであろう。もしそうであるなら、国が小さければ小さいほど、ますます進歩的ということになろう。人口一万一千人のサン・マリノは、一億人の人口をもつ合衆国よりもはるかに容易に進歩的になるであろう。しかし、新しいものが民主主義国において、すべての国民に同時に近づき、すべての国民が全体として一人の専制君主と同じく急速にそれに捉えられるということもまた起こりうる。新しいものが、すべての個人――専制君主であれ、民主主義国の市民であれ――を捉えるかどうか、またどの程度まで捉えるかということは、彼らがその中で生きている諸条件――彼らが受けた教育、情報伝達の手段――によるのであり、また少なからず彼らの利害――個人的利害であれ、階級的利害であれ――が、どの程度まで新しいものを彼らに歓迎させるか、あるいは有害とまでは言わないとしても、うさんくさいものと思わせるかにかかっている。農民の民主主義は、新しいものに対して工業プロレタリアートの民主主義とは全く異なった態度をとるであろう。他方で、専制君主は民主主義を採用するよりもはるかに喜んで、新しい税の理念を採用するだろう。議会制度の理念に対しては、たとえそれが長期にわたって専制君主に説教されたとしても、彼は耳を貸さないであろう。ところが、民主主義はこの新しい理念を素早く採用するのである。

それゆえ、なぜ民主主義の方が初めから専制政治よりもより多く保守的性格をもっているのか、全く理解することができない。

バウアーの論証は、相互に厳密に区別されなければならない二つのものを同一視することによって、いささかも改善されていない。ここでは民族的精神文化が問題となっている。しかし、バウアーは国内で法律となる意志について、一息で語っている。立法が専制的に統治されている国における方が、民主主義国におけるよりもはるかに容易な行為であることには、いささかの疑いもない。前者にあっては、あらゆる君主の気まぐれが直ちに法律となるが、それによってあらゆる君主の気まぐれが民族の精神文化にとって決定的になるのであろうか。このことをバウアーは、よきマルクス主義者としてたぶん主張しないだろう

と思う。彼は、今日の君主の気まぐれは明日は国中のすべてのお城の流行となると述べることによって、困難から脱しようとしている。だが、お城は民族ではないし、流行は精神文化ではなく、せいぜいその最も表面的な外観にすぎない。そして、君主個人も環境が個人を規定するというすべての個人に通用する法則から免れているわけではない。専制君主は、お城の流行が彼の気まぐれの産物であると錯覚するかもしれない。緻密な観察者は、この気まぐれがお城の流行の産物であるということ、少なくともお城と君主との間に緊密な関係が存在している時にはそうであることを発見するであろう。このような関係が欠けているか、相互に無視し合ったり、反目し合ったりしている所では、一方の気まぐれが他方の流行を規定することはない。だが、我々がお城の流行を越えて、民族の真の精神文化に到るならば、専制政治であれ、民主主義であれ、いかなる状況の下にあっても、この文化を新しい理念で満たすたった一つの道だけが存在する。その道とは、そのような理念が民族のすべての成員を獲得し、彼らによって採用され、習得されるという道である。専制政治もそのかぎりでは民主主義と異ならない。だが、おそらく専制政治は新しい思想が民族に接近するのを困難にし、それによって妨害的、保守的な作用を及ぼすという点で異なっている。

勿論、専制政治もまた国家を経済的に破滅させず、軍事的に戦闘能力のないものにしたくないならば、資本主義社会において交通を発展させなければならない。専制政治であろうが民主政治であろうが、交通が活発になればなるほど、民族の相互作用はそれだけ強力になり、物質文化においてだけでなく、精神文化においても民族は互いに接近する。

この普遍的な観察の妥当性をぐらつかせるためには、バウアーはもっと強力な証拠を提出しなければならなかったはずである。実際、この点における彼の論証は、彼の本の大部分と比べて目立って弱体である。

だが、彼の証明がどれほど弱体であろうとも、人は望むものを喜んで信ずる。かくして、民族の差異化の進展という見解は、民族主義的心情をもった社会主義者の間で急速に受け入れられた。ダヴィットは『世界大戦における社会民主党』（ベルリン、一九一五）という彼の本の一九〇ページで同じ見解を主張している。この見解は国際主義的思考にとって重大な危険となる。実際、民族が将来においてますます分化し、ますます鋭く隔てられるとするならば、民族の特性の磨滅と民族部分の同化は歴史の発展過程に矛盾するものではないであろうか。

もし社会主義が民族の完全な自決と同義であり、人民大衆にとっては、文化はただ民族文化としてのみ享受しうるものであるならば、民族こそが社会主義的関心の中心をなすことにならないだろうか。

バウアーの定義をもう一度思い出してみよう。

「全人民の民族的文化共同体への編入、民族による完全な自

決の獲得、民族の分化の増大――これが社会主義を意味する」。

完全な自決と民族の分化の増大については、すでに論じた。民族的文化共同体の方はどうだろうか。

七、民族と文化

オットー・バウアーにとっては、民族は言語共同体ではなくして、運命共同体から生じた性格共同体および文化共同体であることを、我々はすでに見てきた。

彼にあっては、運命共同体から即座に性格共同体が出てくるのである。勿論、特殊な種類の性格共同体である。他の性格共同体は階級である、と彼はいう。すべての階級は、国がどれほど異なろうと共通であるが、他の階級からは区別される特質を持っている。それは、運命の同質性によるものであって、共通性によるものではない。イギリスとドイツの労働者は同じ階級状況の中にあるが、運命共同体を持ってはいない。というのは、彼らは異なった言語を話しているので、お互いに交流しないからである。それに反し、イギリスの労働者とイギリスの資本家は、同じ言葉を話し、それによって相互に交流することができる。

「民族の成員の間に交通共同体が存在するということ、つまり直接、間接の交通による絶えざる相互作用が存在するということ、このことが民族を階級の性格共同体から分かつのである」（一一三ページ）。

二、三ページ先にいわく、

「子供は、自分が産み落とされた社会の経済生活、法、精神文化の影響力の下におかれるのである。ここでもまた、絶えざる交通共同体のみが、性格の共通性を生み出すのである。この交通の最大の道具が言語である。言語は教育の道具であり、すべての経済的、精神的交通の道具である。言語による意思疎通の可能性の範囲が、文化の作用する範囲でもある。言語の共通性が達するかぎりにおいて、この交通共同体は緊密な共同体でありうる。交通共同体と言語は、相互に条件づけあっている」（一一五ページ）。

バウアーはここで、民族を言語共同体として認識するという最善の道に立っている。しかし、彼はこの道をこれ以上追求することをせず、民族的性格共同体の探究によってこの道からそれたのであった。

性格共同体の源泉とされている運命共同体は、今や実際には交通共同体として現れている。しかし、そのような交通共同体からいつでも性格共同体が生み出されてくるわけではない。少なくとも階級闘争のような敵意に満ちた交通からは出てこない。交通共同体からではなく、その下で人々が生きている諸条件の同質性から、個々人の性格の永続的な一致が出てくるのである。一階級にとりわけ特徴的な生活諸条件と並んで、一地方のすべての階級に作用し、そこの定住者に特別な性格特徴を与え、遂には遺伝的特質さえも付与するような生活諸条件もある。シチ

リアの永遠に青い空が、この島のすべての住民に影響を及ぼすように、ノルウェーの霧とはてしなき冬の夜とは、そこの労働者に対してと同じく、ブルジョアジーに対しても影響を及ぼす。だが、生活諸条件のそのような同質性から生み出される性格の共通性は、せいぜい狭い地域に局限される小民族においてのみ、民族的性格として現れうるにすぎない。それはむしろ、地域的、局地的性格のものである。

同じことは、ある地域の自然的ではなく、歴史的に形成された持続的生活諸条件についてもいえる。

すでに一九〇七年に、私はバウアーの本に対する書評の中で述べた。

「全民族が同じ諸条件の下で生活している所では、彼らは共通の民族的性格を発展させるであろう。それに反して、個々の民族同胞が生活している諸条件が多様であればあるほど、たとえば地理的諸条件――平野か高山か、内陸か海岸か――が異なっていればいるほど、分業と階級区分――農業と工業、大都市と村、知識階級と無知な人々、等々――が進んでいればいるほど、最後に、民族のそれぞれの部分で社会発展のテンポが異なっていればいるほど――ある部分はまだ半封建的状態の中で生活しているのに、他の部分はすでに高度に発展した資本主義的生産様式に到達しているというように――、共通の民族的性格についてはそれだけますます語り得なくなる」（『民族性と国際性』、五ページ）。

そして、私はドイツ民族の前に現れている条件の違いを指摘して、質問する。

「ドイツ民族を他の民族から区別するような一定の民族的性格は、一体どこに存在するのであろうか。ラインラント人がドイツ人の代表なのであろうか。それとも上バイエルン人であろうか。ホルシュタイン人であろうか、それともウィーン人であろうか。ドイツ人の典型をなすのは、ファウストであろうか、カール・モールであろうか。ビスマルクであろうか、ブレージィヒ伯父さんであろうか」。

民族的性格の捉えどころの無さは、すでに多くの研究者を困惑させてきた。戦時のわが教授世界の茶番的業績のなかで賞賛された小冊子である『商人と英雄』と題する本の中のゾンバルトの「愛国心」に面白い表現がある。。

商人、それはイギリス人であり、英雄はドイツ人だ、というのである。

ゾンバルトは、「ドイツ精神」を定義しようと試みる。

「我々は、フリードリッヒ・ニーチェが我々に語った最善のものによって、両者共にまぎれもなくドイツ精神の故郷であるポツダムとワイマールで市民権を得ているということを知っている。（両者共にドイツの中心にあり、その周辺はケーニヒスベルクとウィーンで終わっている）。

ところで、このドイツ精神なるものは、一語で特徴づけることのできるような何か統一的なものであろうか。あの四つの町

を数え上げるだけでも――それらと並んでヴィッテンベルク、ハンブルク、ケルン、ミュンヘンがその権利を主張しようとすればなおさら――ドイツの本質を一義的に規定しようとする試みを見込みのないものと思わせるであろう。

かつてランケは叫んだ。

『いつか誰かがドイツ的なものとは何かを、概念や言葉で捉えようとするだろうか。誰かが、我々の世紀や過去や未来の世紀の守護神の名を挙げることによって、そうしようとするだろうか。それはただ、他の岩のような道へと誤り導くもう一つの幻想になるだけであろう』、と。

ドイツ人は『定義からすべり落ちるものであり、それがすでにフランス人を絶望させてきた』と、『ドイツ人とは何か』という問いが決して死に絶えないことがまさにドイツ人の特徴だとみなすニーチェは述べた。そしておそらく、人がすべてのドイツ的本質に再発見する唯一の物は、永遠に変化するものであり、ドイツ的なものは本来存在せず、永遠に生成するものであるがゆえに常に他在であり、果てしなき多様性、個性と特殊性における尽きることのない豊かさ、ロマン的な言葉の過剰の中に現れているような『個性の深淵』である」（五四、五五ページ）。

これは、ファウストが神についてグレートヒェンに与えた定義をいくらか思い出させる。

感覚がすべてであり、

名前は響きと煙にすぎぬ

そして事実ゾンバルトは、ドイツ人の神のような特性について語った。

「我々が神なるものとの結合をすでにこの世で成し遂げているということが、我々ドイツ人の思考の最も輝かしい特質である」（六二ページ）。

「それゆえ、我々の時代のドイツ人は、誇り高く頭を上げて、神の民であるという自覚をはっきりもって、世界を押し渡って行かなければならない。それゆえ、この地上のあらゆる動物の上に高く飛んでいるドイツの鳥、すなわち鷲のように、ドイツ人は、自分たちを取り巻き、自分たちの下に無限の深さに見えるすべての民族の上に超然としていなければならない」（一四三ページ）。

それゆえ、それは「ドイツの鳥」である。そのような超人性にもかかわらず、ゾンバルトはドイツ人を定義できると信じている。勿論、ワイマールとポツダムが何を意味するかを彼は我々に語っていない。どれほど思い上がったとしても、彼もドイツ人はすべて半分はゲーテで、半分はフリードリッヒ二世だとは敢えて主張しないであろう。ゲーテの時代においてすらワイマールの劇場を支配していたのは、フリードリッヒ二世ではなく、コッツェビューであったというのは確かである。そして、ポツダムでもフリードリッヒ二世タイプの人間よりも、伍長タイプの人間の方にはるかにしばしばお目にかかる。それにもかかわ

らず、ゾンバルトは、ドイツ人の半分はコッツェビュー流の田舎者であり、半分はプロイセン流の伍長であるということを認めようとはしないであろう。

彼はドイツ精神を全く明瞭に二様に特徴づけた。第一は、「遠いイギリスの、あるいは全西ヨーロッパの思想や感情から近づいてくるものすべての断固たる拒否」（五五ページ）である。

残念ながら、ゾンバルトは多くのドイツ人が違った考えをもち、多くのイギリス人がドイツでも有名であるということを否定することができない。だが、そのことは全く簡単に、前者が真正のドイツ人でないか、後者が真正のイギリス人でないかのどちらかであるという事実に由来するものであるというのだ。

ドイツ精神を特色づける第二の性格特徴は、ゾンバルトにとっては軍国主義である。

彼はドイツを軍国主義から解放しようとする「善意の外国人」を嘲笑する。

「他の人々は我々を我々のカイザーから解放したいと望んでいる…あたかもこれらのすべての制度が、ろばの上におかれた荷物のようにドイツ民族の所にある何か外的なものであるかのように。社会的、国家的生活のすべての外的現象は、民族に魂を吹き込む精神の必然的放射であるということを理解することが肝要であるのに」（八三ページ）。

ゾンバルトは軍国主義を「国内における軍事的利益の優先」として正しく定義している。「軍事問題にかかわるすべてのことが、我々の所では優越している…国民生活のあらゆる他の部門は、軍事的利益に奉仕している。とりわけ、経済生活がそれに従属している」。

それが「ドイツ精神」を特色づけている。

「ドイツの軍国主義は、我々の知っているドイツ精神以外の他の何物かでありうるだろうか。それはこのドイツ精神――人はおそらくそれをこのように表現するであろう――が生き生きと活動し、外的な生活形態へと形成されたものである…軍国主義はドイツの英雄的精神の目に見えるようになったものである…軍国主義は軍人精神にまで高められた英雄的精神である。それは、ポツダムとワイマールが最高度に結合したものである。それは『ファウスト』と『ツァラトゥストラ』と塹壕の中のベートーベンの総譜である。つまるところ、エロイカとエグモントの序曲とが、最も純粋な軍国主義なのである」（八四、八五ページ）。

我々は、この含蓄ある「愛国心」のためにいささか寄り道をした。というのは、この挿話が時代の重大さをいくらか明らかにすることに役立つと考えるからであり、我々がそこからドイツ人の民族的性格についての説明を汲みだすことができると信ずるからではない。ゾンバルトの本から最初に引用された言葉だけが注目に値する。これらの言葉は、ドイツ人の民族的性格を異論の余地なく確定することの不可能性を十分に指摘してい

る。そして、正当にもドイツ的とみなされるすべての特殊な性格特徴は、実際にはただ地域的、局地的性格のものであって、民族的なものではないことに言及している。

さらに、同じことがあらゆる他の民族についても、それらの数が多くなればなるほど、彼らが住んでいる地域が多様になればなるほど、全体としてのその経済的発展が進んでいればいるほど、かれらの各部が不均衡であればあるほど、それだけますます言われうる。民族を結びつけ、他の民族から分けるものは、共通の民族的性格ではなくして、言語の共通性である。

二つの異なった語族のメンバーが、同じ条件の下に相並んで住んでいる所では、両者は同じ性格特徴を発展させる。オットー・バウアーは自ら、「チェコ人はチェコ語を話すドイツ人だ、という時それは全く正しい」と述べている（一一八ページ）。

だが、民族的性格なるものが、それを鋭く凝視するやいなや空中に消えてしまう幻影のようなものであるとすれば、「民族文化」なるものもそれと同じ運命を分かちもつものである。我々はすでに、バウアー自身が近代文化の国際的性格を自覚しているということを見てきた。近代文化は民族文化ではなくして、ヨーロッパ文化であり、ヨーロッパに限定されるものではなく、ヨーロッパを出発点として、そこから全世界に向けて放射されるものであるといわなければならない。このことは、物質文化のみならず精神文化に対しても当てはまる。大発明は一民族ではなされず、大思想は一言語では表明されず、直ちに文化世界のすべての民族に彼らの言語で伝えられることなしには顧みられない。普遍的な関心を引かず、あまり卓越していない業績のみが、それが登場してきた民族と言語の領域に限定されているのである。それのみを、人は民族文化とみなすことができる。いずれにしても、それらは近代文化のあまり重要でない部分である。

オットー・バウアーは、民族文化の概念を異なった形で捉えている。彼にとっては、民族文化とは一民族の中に発見されるべき全文化の総体である。それは一民族のみが所有している取るに足らぬ部分の総体であるだけでなく、他の文化民族と共有している途方もない量の文化財なのである。

これらの全文化は、彼の見解によれば、我々がすでに知っている「民族的統覚」によって民族的になる。各人が他人から学ぶすべてを全く変更することなく、その精神の中に取り入れるのではなく、その先天的、後天的気質に応じて加工し、かくしてそれに個人的色彩を加えるように、民族もまた個人のやり方に倣って、学んだものすべてをその特性に適合させ、かくして国際文化に民族的色彩を与えるのである。

この考えは、民族は一定の性格をもった個人であるということを前提としている。民族的性格なしには、「民族的統覚」もまたありえない。

同じ思想が異なった個人によってのみならず、異なった環境においてさまざまに加工されるというのも確かである。しかし、

多様な環境を含まぬ単純な小民族においてのみ、「集団的統覚」が民族的性格を帯びるのである。

文化に対するその関連においても、民族は言語共同体に還元される。勿論、言語、しかも人が自由に操ることのできる言語以外に文化に到る道はない。そんなわけで、今まで人民大衆にとっては、家族の中で身につけ、幼児から使い、それによってある民族のメンバーとなったところの言語のみが考慮されてきた。この民族の文化施設が完全なものになればなるほど、学校がますます整備されて、通学が容易になればなるほど、新聞や書籍が専門的なものになり、良心的なものになればなるほど、人民大衆の文化はそれだけ高度なものとなるであろう。

これが民族と文化の間の関連である。

だが、それによって、母語が文化にいたる唯一の道であるとか、すべての言語が同じ力を持っているとか、母語がいつでも文化の進歩のための最も有効な手段をなしているがゆえに、母語の使用と民族性の保持とがすべての人の義務であるとかいうことは、決してできない。

ヨーロッパの文化共同体の民族のあらゆる言語は、我々に近代文化を伝えている。勿論、すべての言語が同じ範囲においてではない。経済的に遅れ、交通から遮断された小民族は、自分たちの言語だけが頼りである人々に対して、国際交通の真っ只中に位置し、多くの人口を抱えた経済的に進んだ民族ほどには、多くの近代文化の成果を伝達しえないであろう。

我々が、例えば約一三〇万の人口を数え、ほとんどもっぱら農民、小ブルジョア、プロレタリアートのみから成り、やっと書物が出版され始めたばかりで、二つほどのギムナジウムを持つのみで大学を持たないスロベニア民族を、その言語がほぼ八千万の人々によって母語として話され、数百万人のインテリゲンツィアを持ち、五百を越えるギムナジウムと、ほぼ四千人の講義者と六万人の受講者を持つ二二の大学を持ち、数世紀にわたって作り上げられてきた文学、芸術、科学を持つドイツ民族と比較してみるならば、直ちにドイツ語の知識を持った人は、スロベニア語の知識しか持たない人よりも、はるかに広い文化圏の鍵を開けることができる、ということが明らかになる。何人も母語のみでは、近代文化の完全な所有に到ることはできない。その人の所属する民族が後進的であり、小さなものであればあるほど、母語の限界はそれだけますます文化における、文化の受容における、文化への協力における限界を意味する。母語への執着ではなくして、多言語使用による民族的限界の克服が、そこでの義務となりうる。

他方で、人民大衆の文化水準は、単に学校や書籍で新しい事実や理念を知るということによってのみ高められるわけではない。それはまた、大衆の経済的、政治的力、彼らが自由にしうる物質的手段や余暇によっても高められるのである。両者が共に作用しなくてはならない。賃金の上昇と労働時間の短縮も、もしそれが科学的、芸術的関心と視野の拡大をもたらさなかっ

たならば、それだけではほとんど意味がない。反対に、このような文化的上昇も、過労と飢餓とが大衆を鈍感にし、直接的な肉体的享楽以外のあらゆる努力、あらゆる楽しみに対して無感覚にするかぎり不可能である。

だが、このことはプロレタリアートの文化的上昇は、階級闘争によってのみ、しかも単なる賃金闘争ではなくして、大きな社会的、政治的目標のための解放闘争という形をとる階級闘争によってのみ可能となる、ということを意味している。

この闘争は、最も広範な労働者の国際的な意思疎通なしには不可能である。そして、この意志疎通は労働者の間での多言語使用が広まれば広まるほど、また他言語、特に文化語を習得する機会を提供されるすべての人がこの可能性を利用すればするほど、それだけ容易に達成されるであろう。

ある地域の労働者が、相互に意思疎通し合うことができるためには、皆が同じ言葉を話しているということが、最も緊急な差し迫った必要事である。労働者が異なった言語を話す住民の中に移され、そこでこれらの人々から隔離され、母語のみに閉じこもっているとすれば、プロレタリア階級闘争において大きな誤りを犯すことになるだろう。

増大する国際的な商業交通の必要と国際的な階級闘争の必要、そして最後に労働者の移動――国内の移動と完全な移民――の増大は、二つまたはそれ以上の言語を自由に操ることのできる人々の数を急速に増大させている。いくつかの言語を話すことのできる人は、自分の生まれた民族に縛られてはいない。彼は自由に民族を変えることができる。

かくして、民族文化の概念は、近代文化はすべての人にとってただ母語を通じてのみ到達可能であるとか、個々人はよかれあしかれ自分の生まれた民族に結び付けられているとか、民族を通じて、民族とともに文化的に上昇しうるとかいった意味では、決して正しくない。

そして、この上昇は諸民族を分化させ、鋭く分かつどころか、相互にますます接近させ、その特性を磨滅させ、彼らの同化、とりわけ遅れた小民族のメンバーの同化を容易にする。我々はこの過程をすでに民族国家の中で考察した。このことは、資本主義的交通の全領域に当てはまる。

社会主義社会は、この過程を妨害しないだけでなく、むしろ促進するであろう。人は今日ではすでに二、三の文化語を自由に操ることができないならば、言葉の最も完全な意味において教養ある人とはいえないであろう。人民大衆にとっては、まだ高等教育の機会は閉ざされている。社会主義はすべての人々にこの機会を与え、それによってすべての人々を特定の言語と民族の限界から解放するのである。

社会主義はまた、あらゆる民族的抑圧政策をも終わりにするであろう。

八、民族の闘争と社会主義

多民族国家における民族間の対立は、民族的性格や民族文化の対立から生ずるものではない。差異はいかなる対立をも意味するものではない。

民族的対立は、市場と国家権力をめぐる闘争から生ずる。たとえば、チェコ人がヨーロッパ文化を「民族的に統覚する」やり方は、ベーメンのドイツ人にとっては全くどうでもよいことである。しかし、ライヒェンベルクのドイツ人ジャーナリストにとっては、都市の住民がドイツ語の新聞を読むか、チェコ語の新聞を読むかはどうでもよいことではない。ドイツ人の小売商人、医者、弁護士にとっては、住民がチェコ語を話す小売商人、医者、弁護士の方をドイツ語を話す彼らよりも進んで選ぶかどうかはどうでもよいことではない。ドイツのブルジョアジーにとっては、彼らのインテリ青年層が国家や自治体の官職の中に、チェコ語を話すインテリたちよりもよりよい昇進の見込みを持っているかどうかは、どうでもよいことではない。

それゆえ、各々の民族の努力は、自語の通用範囲を暴力的に拡大し、他語のそれを狭めるために、あるいはこの種の暴力的手段を打ち砕くために、国家権力を我が物とすることに向けられる。

ここが、民主主義や社会民主主義が、民族闘争に対して関心を抱く点である。しかしながらまさにここに、今日の国家における諸民族の接近と同化に対する最も困難な障害もまた存在するのである。

被抑圧者に味方し、彼らを見捨てないことが、すべての真の民主主義者の道徳的義務である。たとえそれによって彼の能力が増大するにしても、被抑圧民族から離れ、抑圧民族に与することは困難になるであろう。民族の所属を替えることは、そのような条件の下では、非良心的な栄達主義の性格を帯びるであろう。抑圧はいつでも、言語共同体であれ、教会共同体であれ、地域共同体や階級であれ、共同体をしっかりと結びつける最善の手段であった。

征服者が占領地域を例外状態に保っておこうとすれば、新たに獲得した地域の全体国家への内的融合を阻止することが最も効果的な方法である。宗教は、たとえ死滅の過程にあるとはいえ、迫害の時代を経て新しい力を得た。それによって、ユダヤ人の同化が今日まで最も効果的に阻止されている。

このことはまた、多くの民族についても当てはまる。チェコ人――「チェコ語を話すドイツ人」――は、もし何かをなそうとするすべてのチェコ人にドイツ語を学ぶことを強制する交通の必要のみに任せておいたならば、おそらくすでにゲルマン化――一世紀前にこの過程はすでにかなり進んでいた――されていたことであろう。同化を暴力的に促進しようとする試みが、それを妨げた。チェコ民族のための闘争は、チェコ人にとっては同権と民主主義のための闘争と同義になった。

このような障害は、社会主義社会においてはなくなる。市場

のための生産の廃止とともに、市場をめぐる闘争も終わりになる。そして、国家も支配のための制度であることをやめる。国家がそのようなものであるかぎり、国家は民主主義に敵対的な要素にとどまる。なぜなら、民主主義は階級の支配に対立するものだからである。今日の国家において民主主義的権利として存在するものは、原始状態からの残存物でないかぎりは、いやいやながらの国家から闘い取られた譲歩にすぎない。完全な、真の民主主義は、今日の国家においては実現不可能である。それは常に中途半端なものにとどまるであろう。

それに対して、プロレタリア国家は民主主義なしでは存続できない。民主主義はプロレタリア国家にとっては、国家がなす譲歩ではなくして、生存条件である。それと同時に、権力をめぐる国内での民族闘争もその基盤を失う。その時には、言語は国家生活においてもはや支配の目的には奉仕せず、行政の目的にのみ奉仕する。国内における言語上の諸関係は、もっぱら合目的的理由と人民大衆の必要に適合させられるのであって、支配階級とその機関の必要に適合させられるのではない。正義発見の必要や、被告人や証人の必要が、法廷用語を決定するのであって、裁判官の必要が決定することにはならないであろう。教育効果や生徒の必要が、授業語を決定することになって、教師の必要が決定することにはならないであろう。鉄道語を決定するのは、交通の必要であって、指導的な官吏やそのパトロンの必要ではないであろう。それと同時に個々人にとっても、民族への所属とその言語の使用は、単なる合目的性の問題となるであろう。すべての人は、自分が理解しうる言語の中で、最もよく近代文化に参加することができ、最もよく近代文化のために仕事をすることのできる言語の使用を選ぶであろう。今日抑圧された弱小民族のための強力な絆となっている民主主義的団体の義務は、その時には民族の保持のために活動することをやめるであろう。かくして、多くの言語の島や入り混じった民族の破片の同化と解消のみならず、全民族の同化と解消が今日よりもはるかに急速に進むであろう。

我々はここですでに繰り返し、一部はO・バウアーによって誘発されて、社会主義の支配の下での民族問題の形態を取り扱ってきた。このことは、現下の戦争目的に対するインターナショナルの態度に対して民族問題がどのような影響力を及ぼすことになるかだけを論じている当面の関連の中では、我々には直接関係がない。しかし、現在における我々の行動は、未来への準備以外の何物でもなく、我々が未来に対して持っている観念によって規定される。そして、我々の目標の方向に向かっての断固たる、急速な前進はプロレタリアートが権力を獲得した国家において初めて期待されるべきであるとしても、ブルジョア社会とプロレタリア社会の間の境界は弾力的なものであり、我々の追求している目標の可能なかぎり多くを、今日すでに実現すべく努めなければならない。かくして、我々の現在の活動は、我々の究極の大目標と確固たる必然的な関連の中にあるのであ

る。

それゆえ、我々が社会主義社会における民族問題の形態を、その原理の帰結としてどのように考えるべきかについて、なお若干述べておく必要がある。

我々はすでに、社会主義社会が民族対立を極度に弱め、ついには無くし、それによって民族的差異の多くを除去することに寄与するにちがいない――支配機関から単なる行政機関への国家の変態と、階級的差異の廃止と手に手を取って進む完全な民主主義の実現の結果として――ということを見てきた。

他面で、まさに民主主義への欲求が、民族国家の意味における国境の変更への強力な推進力を与える。なぜなら、民主主義は人民大衆の言語が国語である民族国家において最も完全に真価を発揮するからである。

しかし同時に、国境自体も今日までの性格を失ってしまうであろう。生産が私的なものから社会的なものになり、個々の企業家の利潤が生産の誘因であることをやめる時、関税もすべての意味を失うであろう。関税は「保護関税」として、「保護すべき」産業部門において資本の利潤を人為的に高め、それによって資本がこれらの産業部門を追い立てることによってのみ有効なものであるからである。関税とともに、人為的な交通単位として国家を相互に遮断することもなくなるであろう。

その際、我々がすでに見たように、社会主義は特殊な民族運動の結果ではなく、国際的な運動の結果であり、そこにおいては個々の国家の主権は廃止され、それらすべては大きな全体、すなわちヨーロッパ合衆国の部分となるであろう。ここにおいてヨーロッパとは、大陸ではなくして、ヨーロッパ文化の全領域と理解されるべきである。イギリスの加盟によって、ヨーロッパ合衆国は全大陸の合衆国となるであろう。

それと同時に、軍事的安全の問題としての国境の問題も全ての意味を失うであろう。

個々の国家は、自治をともなう単なる特殊な行政管区となるであろう。このことはまた、個々の国家が言語領域を包括するという方法で境界設定を行うことを容易にする。社会主義社会において初めて、事態の本質が一般に許す範囲まで民族国家を全面的に展開する可能性が生ずる。だが、このことは個々の至高の国家が存在することをやめる時に、同時に起こるであろう。民族的主権ではなくして、民族的自治のみが、この発展の目標となるであろう。

最後に、行政管区の民族的境界設定も、大衆教育の向上がすべての人に母語と並んで一つの世界語を理解できるようにし、その結果すべての人が世界中至る所で行くべき道が分かり、意志疎通することができ、くつろぐことができるようになることによって、その意味を失うにちがいない。

民族の分化ではなくして、同化が、民族文化への大衆の接近ではなくして、ますます世界文化と同義となるヨーロッパ文化への接近が、社会主義的発展の目標である。

九、世界文化の単調さ

奇妙なことに、民族とその文化の同化という目標と情熱的に闘っている社会主義者たちがいる。民族の多様性、したがってまた言語の多様性がなくなると、全面的な単調さと精神的貧困に行き着くであろうというわけである。

だが、このことはそれ自体まだほとんど証明されていない。工場製品もまた、手工業や家内工業の製品と比べるとはるかに均一であるが、その普及を阻止しようとすることは反動的である。

ここではさしあたり、それが我々の気に入るかどうかは問題ではない。国際交通の増大から生ずる諸民族の同化過程が、我々の気に入るかどうかは我々にとって問題ではなく、我々がこの過程を放置しておくのか、それとも暴力的に介入すべきなのかが問題である。我々は民主主義者として、人民大衆に対するあらゆる暴力行為、言語関係や宗教関係へのあらゆる暴力的介入を拒否しなければならない。個人が国家の中で、その言語や宗教のゆえに、他の人々よりも不利な状況におかれるというようなことがあってはならない。しかしまた宗教と同様、ある言語の使用が国家の指示により自発的な放棄から保護されるべきでもない。

政治的強制に劣らず、我々は社会主義者として、プロレタリアートの擁護者として、ある言語の利益のための、あるいは不利益のための経済的強制のあらゆる適用に対してもまた、宗教の奨励や迫害に対するのと同様闘わなければならない。このような中立的態度が、多くの言語や多くの宗教を不要にしてしまうかどうかは、我々には関係がない。たとえ我々がこの結果をどれほど遺憾に思うとしても。

だが、我々は多言語状態の消滅を遺憾に思う必要は全くない。一般に、資本主義の進展が必然的にもたらす単調さや平均化の増大は、勿論決して楽しいものではない。ダヴィットが『社会民主主義と世界大戦』という彼の本の我々によってすでに言及された箇所（一九〇ページ）で、民族の分化の進展を「すべての発展は一層の分化」であり、我々は「ここで偉大な生物学の法則が作用しているのを見ている」という理由で必然的なものと主張している時、それは全くの誤りである。ここで我々は社会を論じているのであって、動物的有機体を論じているのではない。それゆえ、この点では生物学は我々には何の関連もない。その経済的洞察を、おたまじゃくしの成長からではなく、資本主義的生産様式の発展から得る人は、資本主義が我々にもたらす生産物という形での富の増大は、単調さの増大、形態の貧困化を伴うものであることを見出す。そして、この関係はなんら偶然ではない。

今日の生産様式における労働生産性の高さは、大量生産の結果であり、それはいつでも均一な生産である。生産物と生産手段は、ますます均一になるであろう。生産手段の中で最も重要なものは、自然そのものである。

文化の前進、すなわち自然に対する人間の支配の前進は、形態における自然の貧困化を意味し、原始林の植物の多様性が農場の単一さによって置き換えられることを意味し、野性の動物の果てしない豊かさがわずかな種類の家畜によって置き換えられることを意味している。人類の登場に到るまで、自然はますます多様性を増大させる方向に発展してきた。人類の登場以来、有機的自然の発展はもはやそれ以上の進歩をしなくなった。

「鮮新世の半ば以来、我々は確実な新しい種の生成を証明することができない。洪積世および現代の特徴は、ホモ・サピエンスの登場と並んで絶滅と貧困化のみである」（W・ロベルト、『動物界の拡大』、一九〇二、序言）。

資本主義は、この貧困化のための手段と衝動を飛躍的に高めた。それは真に驚くべき規模に達している。環境は人間に反作用せずにはおかない。形態における環境の貧困化は、環境の多様性の減少から、人間の精神的能力の適用方法の減少が生み出されてくるかぎりで、人間の精神的貧困化を引き起こすにちがいない。

しかし、これを阻む要因もまた存在する。自然の形態を否定する同じ技術が、自然人の感覚では達することのできない形態の認識へと導く。技術は地球を掘り返し、太古の世界の豊かな姿を人間に示す。望遠鏡は途方もなく遠い世界の秘密をあばき、顕微鏡ははるかに小さな世界をはっきりと見せる。

同じ技術がまた、人間をますます生存の必要のための闘争から解放し、贅沢のためのより多くの時間と手段とを与える。だが、この贅沢こそ人為的に保持された、あるいは人為的に作りだされた多様性以外の何物でもない。

贅沢は経済によって制約されている。労働生産力が大きくなればなるほど、贅沢の可能性も大きくなる。したがって、一方で経済によって作り出された生活の単調さが増大すればするほど、贅沢によってそれに対抗する可能性もそれだけ増大する。贅沢は経済と対立するものであり、この意味で浪費である。だが、それは無意味な浪費であるわけではない。それは、ただ無意味な人の手の中でのみ、そうなるのである。

自然の一部が開墾されないままにとどまり、役に立たない野性の動物が大切にされ、廃墟がそのままに保存されて、誰もそこから建築用石材を持ち去らないとすれば、それはすべての芸術が贅沢であるというのと同じ意味において贅沢である。それは経済によって生み出される生活の貧困化を阻止し、現存の多様性を保持し、新たな多様性を作り出す。

贅沢が提供するこの種の生活の多様性は、階級的差異が存在するようになって以来今まで、科学から生み出される多様性と同様、所有階級の特権となっていた。労働者階級は、経済的発展の他の側面のみ、すなわち資本主義社会で頂点に達する生活内容の荒廃と単調さの増大のみを味わうことになる。

社会主義は生活の貧困化への反作用となり、科学、芸術、自然の享受を人民大衆の共有財産にするであろう。これが経済か

ら生み出された生活の単調さを阻む道である。

その際、重要な役割を演ずるのが、人口問題であろう。前世紀は過剰人口の懸念に支配されていた。貧困は過剰人口のせいにされた。それは全く是認されないことであった。二〇世紀は人口減少の懸念で始まった。社会主義者たちでさえ、この懸念を共有し、出生率の低下に対して不安げに振る舞った。しかし、急激な人口増加は自民族の数をできるだけ大きく見せようとし、それによって世界政策においてできるだけ大きな力にものを言わせようとする民族的強権政治の観点からのみ望ましいものである。大衆の福祉にとっては、このような急激な人口増加は決して必要なものではない。なお一世紀間、今までのテンポで進むならば、我々は恐るべき状態に立ち至るであろう。一四世紀のヨーロッパの人口は、一億人と推定することができよう。一八世紀の初めにおいてもなお、目立って増えているようには思われなかった。しかし、それからヨーロッパの人口は一八〇〇年までに一億七千五百万人に増え、その時から世界大戦の勃発までに四億六千万人に達した。同じテンポで増加すれば、今後百年後には一二億人の人口になるだろう。

そうなったからといって、これらの人民大衆を養っていくことができないのではないかというマルサスの恐怖に取りつかれる必要はない。だが、その際、贅沢、特に自然の贅沢はあまりにわずかなものになってしまうであろう。養わなければならない口の数が多くなればなるほど、耕作可能な土地はすべて開墾されてしまうであろう。

そのような方向に行かないようにするためには、我々が心配する必要のないところまでの出生率低下が配慮されなければならない。

だが、それによって勿論、プロレタリア家族の少人数がプロレタリアートを解放する手段だなどとは言えない。プロレタリアートの解放のためには、それは全く役立たない。

勿論、社会主義社会も、それに道を開く資本主義社会と同様、大量生産に依拠している。この種の生産から、単に社会の全成員に生活のすべての必要物を供給するだけでなく、彼らがすべての文化財に近づきうるようにし、すべての人の必要労働時間を最小限に短縮し、自由時間、すなわちすべての人の真の豊かさを、生活時間の最大部分にすることを可能にする高度の労働生産性が出てくるのである。

大量生産は大量消費を必要とし、大量の人民大衆を前提とし、そのために生産する。

この大衆を生み出す一つの方法は、急激な人口増加である。だが、社会主義的状況の下では、そのような人口増加は期待できないし、人民大衆の贅沢願望と矛盾することになる。しかし、幸運なことに、人口増加は大量生産の拡大によって労働の生産性を上げる唯一の手段ではない。この目的のためのもう一つの方法は、人民大衆の間の交通の増大にある。それによって、人民大衆の不可欠な欲望がますます均一な形をとるようになり、

全世界が原料を供給しているわずかの工業中心地からの製品によって、ますます満たされることになる。

国際間の交通が最高度に緊密に結びつくことが、社会主義社会の生存条件となるであろう。その必然的な結果は、交通の障害となるものの排除であり、この障害の中で最も重要なものは言語の差異である。

社会主義社会は、確かに資本主義経済が必然的に伴う単調さの増大を阻止しなければならないだろう。だが、社会主義社会は経済の領域自体では、この単調さを阻止することはできない。なぜなら、社会主義社会が、自分たちが依拠している高度な労働生産性という太い枝を切り倒して自ら墓穴を掘りたくないならば、民族の同化の前進という作用を伴う大量生産を続けていかなければならないだろうからである。言語の多様性の保持によってではなく、贅沢――その中でもとりわけ、あらゆる美、あらゆる富、あらゆる喜びの源泉であるまだ手を触れられていない自然の贅沢――の拡大によってのみ、社会主義社会は経済の単調さに対抗しうるのである。

聖書においてすでに、言語の多様性は人類に対する暴力的侵害とみなされている。聖書がすべての人間を一組の男女から発生させたように、聖書はまたもともと一つの言語のみが存在していたと仮定した。今や人類は数と知力を増し、天まで届くほどの塔を建て始め、神が人類を恐れ始めた。神は、人類が皆相互に意思疎通することができるならば、もはや人類から身を守ることができないと考えた。

「そこでヤハウェいわく、彼らは一つの民族であり、皆同じ言葉を持っている。これはただ彼らの行為の始まりにすぎず、今後彼らのもくろむもので実現しないものはなくなるであろう。さあ、我々は下りていって、そこで彼らの言葉を混乱させよう。そうすれば、何人ももはや他人の言葉を理解することができなくなるであろう」（1・モーゼ書・11、6、7）。

このような方法で、ヤハウェは人類の興隆を挫折させた。ここで歌われているのは、国際性の賛歌である。

人類の言語の分裂は、人類の力の弱体化を意味する。人類の言語の統一は、力の最高の頂点への上昇を意味する。それに反対することは、反動的である。多様性を求めて諸民族が相互に意思疎通するのを妨げようとすることは、よき意図のために不適当な、いやそれどころか逆の、有害な手段を適用することを意味する。

一〇、人民投票

我々は近代国家、近代民主主義――原始的民主主義と対立する意味での――、書き言葉の共通性に基づく近代民族、ならびに民族国家への努力、すべてこうしたことは同じ根から、すなわち資本主義的生産様式の最も重要にして、最も本質的な要素の一つである現代の交通体系から生じているということを見てきた。さらに我々は、民族国家への努力と国内での民主主義へ

の努力は、それが諸関係の中に深く根ざしており、我々の時代の政治生活を支配しているがゆえに決して抑圧されえないということも見てきた。しかし、その際、こうした努力は次々と大きな障害に突き当たり、その結果人はそれらを資本主義国家の内部では、かぎりなくそれに接近しようと努めても、完全には到達しえない理想にしてしまったということも明らかになった。

だが、その際、民主主義のための努力と民族国家のための努力との間には、大きな違いがある。プロレタリアの勝利は、前者の努力を完全に実現するが、後者の努力を大部分根拠のないものにしてしまうであろう。というのは、この勝利は支配機関としての国家の性格を廃棄してしまうからである。そして、すでに今日の社会では、この二つの努力は次の点で異なっている。つまり、民主主義のための努力は、あらゆる近代国家において、あらゆる条件の下で登場し、ただ階級間の勢力関係にのみ限界を見出すのであるが、他方、民族国家のための努力はあらゆる条件の下で登場するわけではなく、単に権力関係によってのみならず、他の自然的、歴史的諸条件によっても妨害されうるのである。

勿論、民族自決のための努力は普遍的である。しかし、プロレタリアートにとっては、民族の利益はただ民主主義の利益と一致する時にのみ意味を持つ。

民主主義および民族自決に力を持たせるための有効な手段としては、民主主義的な人民大衆の強化と最終的な勝利、ならびにこの意味での国際社会主義のための革命が問題になる。だが、今日のブルジョア権力者の戦争にすぎない戦争は問題とならない。そのような戦争はいつでも、抑圧された民族の解放以外の他の目的に奉仕している。抑圧された民族の解放はせいぜい副次的な結果にすぎず、最善の場合でも不完全なものであり、強者の権利にのみ依拠しているがゆえに、場合によってはそれが除去するという悪よりも一層悪い民族独立の新しい侵害と結びつくという危険がある。

その点において、社会民主主義はいかなる戦争目的も持っていない。社会民主主義はいかなる戦争も支持せず、一度勃発した戦争を民族解放の目的のために延長することも支持しない。

国際社会民主主義は、戦争という手段によって達成すべきいかなる目的も持っていない。この主義は、戦争においてはただ他の人々の戦争目的に対してのみ態度を決定する。この主義がいかなる条件の下においても、戦争という手段を認めないということは、あらゆる戦争目的に対して等しく拒否的に対処するということを意味するものではない。その目的の多くは、この主義の原理と一致することができるが、他のものは一致しえない。

かくして、国際社会民主主義は戦争という手段によって、民族解放を実現しようとは思わない。しかし、もし戦争がある民族の解放へと導くならば、社会民主主義は決してそれに反対せず、それを歓迎するであろう。

ある民族の解放、あるいはその一部の解放は、決して必然的に、その民族に自前の民族国家を与えたり、民族国家から切り離されている民族部分をそれに併合したりすることを意味するものではない。このような変更が、当該住民に不利益になったり、彼らによって拒否されたりするような自然的、歴史的諸条件が存在することがある。だが、周知のように、人は善行を強制すべきではない。ある地域の住民を彼らの意志に反して「解放する」ことは、民主主義の原則にも反することになる。この種の解放は、いつでも無法な併合と感じられるであろう。たとえ、「解放された」住民が、彼らを併合し、解放した国家の言語を話しているにしても。

したがって、国際社会民主主義が国境変更に賛成すべきか否かは、単なる言語地図が決定すべきではなくて、当該住民の意志のみが決定すべきである。いかなる地域も、その住民の意志に反して、国家的所属を変更することを強制されるべきではない。

これは、国際社会民主主義の絶対的命令である。諸民族は、権力者が随意に処理することのできる羊の群れであることをやめるべきである。

この原則は、もっぱら我々にとってのみ問題となるわけではない。我々はすでに何度も、人々はただ言語によって結びつくだけではなく、歴史的、自然的諸条件によってもまた結びつくということに言及してきた。自然的諸条件は、往々統一した交通領域を作り出し、全領域の生産過程を妨害するとか、全労働住民に重大な損害を与えるとかいうことがないかぎり、一部がそこから離れるということはありえない。そのような場合には、国際社会民主主義は、たとえそれが分離する部分の住民の意志に合致するものであっても、国境の変更と闘わなければならない。

熱望されている国境変更の当否を判断するに際して、国際社会主義の立場から考慮さるべき二つの視点がある。我々は、まず第一に当該地域の住民がそれに同意しているがどうかを問わなければならない、次いでそれが生産過程の継続と、その地域が今まで属してきた国家の労働する住民にとって無くても済むような物であるかどうかを問わなくてはならない。

自己の権力領域を損なわれることなく保持したいという権力者の欲望は、当然のことながら我々にとっては問題となりえない。

ところで、当該住民の意志をどのようにして確認するのか。それに対しては、人がそれを尋ねるというたった一つの方法がある。人はすでに、この方法がナポレオン三世によって彼の王朝的目的のために利用されたという理由で、うさんくさいものと思っている。だが、住民の意志を知る他の方法は、未だ知られていないし、今後も知られないだろう。この方法を拒絶しておきながら国境変更を要求し、正当化しようとする人は、単なる征服政策を弁護しているにすぎないことになる。

ナポレオンがそれを利用したということは、まだ何物をも証明しない。彼は普通選挙権を利用する術さえも知っていた。普通選挙権と同様、人民投票もまた時代が違えば、非常に異なったものを意味するのである。

市町村ではなく、国家における人民投票は、近代民主主義の諸条件が存在すればするほど、それだけ賢明に、それだけ適切に遂行されることになる。住民がまだ文盲からなり、郵便も鉄道もなくて住民が相互に交通せず、新聞もなくて彼らが世界の出来事から取り残されているような所では、彼らは新しい国家の問題を理解することができず、彼らの投票は偶然の事象か狡賢い指導者に引きずられる結果となるであろう。

他方で、発達した民主主義国においても、立法と政府に対するコントロールは、人民投票によってではなく、いつでももっぱら議会によってなされている。人民投票はただ、制度としての議会に対して、外から圧力をかけるための不可欠の手段にすぎない。

だが、併合に関する人民投票においては、複雑な法律が問題なのではなく、すべての人が即座にイエスかノーかで答えることのできる平明な事態が問題なのである。

メキシコのような国においては、四〇年前には人民投票はヨーロッパ、特に西ヨーロッパにおけるのとは、全く違ったものを意味した。

ナポレオンがメキシコを占領し、一八六三年にオーストリア大公マックスにメキシコの王冠を与えようと申し出た時、マックスは人民投票が彼の方を選んだという事実に従って、それを受諾した。すでに一八六四年二月に、人は大統領ファレスの暴力的追放の後、ほぼ二千の市町村が彼に賛成を表明した、と彼に告げることができた。しかし、一年もたたないうちに、合衆国はナポレオンは軍隊を撤収すべきであり、メキシコ人民はその政治形態に対する自決権を持っていると主張した。そして、ナポレオン軍の撤退の後すぐに、この「自決」は皇帝マックスに反対を表明した。彼を承認した人民投票の三年後、勝利した共和主義者たちによって、彼が多くの「反逆者たち」に下したのと同じ運命が彼に用意された。逮捕の後、彼は一八六七年六月一九日に銃殺された。

それゆえ、ここでは人民投票は単なる茶番にすぎなかった。ナポレオンと彼の同盟者ヴィクトル・エマヌエルが、一八五九年の戦争後の彼らの併合を批准することを求めて行った人民投票では、事情は違っていた。問題となった地域――サヴォアとニース、ついでトスカナ、パルマ、モデナ、ロマニャ――の住民は、大衆教育、交通体系、政治教育に関して、まだ非常に後進的であったにもかかわらず、彼らはたとえ一瞬といえども、自分たちの投票を放棄しようとは考えなかった。あるいは、こう言った方がより正しいかもしれない。まさに人民の意見がそれほど確実であったので、併合を人民投票によって確認させることに踏み切ったのだ、と。

多くの問題でナポレオンを模倣したビスマルクは、人民投票に関しては彼を模倣しなかった。一八六六年のプラハ講和条約において、シュレスヴィヒの北部地域は、自由な投票によって賛成が表明されるなら、デンマークに返還されるべきであるという決議が採択されたが、その提案者はナポレオンであった。講和条約のこの決定は、全く遂行されなかった。ついにオーストリアは、一八七八年に明白にそれを断念した。

奇妙なことに、エルザス・ロートリンゲンの併合に関しては、一種の人民投票が行われたが、それは承認する投票とはならなかった。ドイツとフランスの間の講和条約は、一八七一年二月一二日に開会されたフランス国民議会によって批准されることになっていた。エルザスとロートリンゲンも代表者を送っており、彼らは講和にもエルザス・ロートリンゲンの割譲にも反対投票した。

ビスマルクが、周知の雰囲気の時に、彼の意図を促進するとは思われないこの種の人民投票にあの地域を委ねたということは驚くことである。ビスマルクの親友ブッシュの言を信ずるとすれば、この承認はただ過失によってのみ起こったことであった。彼の日記の中でブッシュは、一八七一年二月一一日に書き記している。

「彼（ビスマルク）は、ヘンケル（メッツの長官）がエルザスの悪い雰囲気について語り、そこでは本来選挙を認めるべきではないと述べた時、彼もまたそれを望んでいないことを認めた。だが、過失によってそこのドイツの上級官庁への訓令が、他の官庁に対するのと同様に起草された」（日記　一八九九、II、一六二ページ）。

当然のことながら、我々は投票が単に行われるだけでなく、それが尊重されることも要求しなくてはならない。

だが、国際社会民主主義は、併合を歴史的権利によって正当化しようとする試みを断固拒否しなくてはならない。まさにエルザス・ロートリンゲンに関して、このことが今再びフランス側からなされている。

マルクスは一八七〇年に、エルザス・ロートリンゲンのための戦争に関する総評議会の第二の呼びかけの中で、当時ドイツ側から要求された同じ歴史的権利を拒絶している。

「そうだ！　この両州の土地は、大昔にはとっくに死に絶えたドイツ帝国に所属していた。そこで、その土地とその上に育った人間とは、時効にかからないドイツの財産として没収されなければならないというのだ。もし古い地図が、歴史的権利に従って作り替えられるべきだというなら、ブランデンブルク選帝侯が以前はそのプロイセン領についてポーランド共和国の家臣であったことを決して忘れるべきではない」。

これは、当時ドイツの要求に対して向けられたものであった。しかし、勿論このことは誰によって要求されたにしても、すべての歴史的権利に当てはまることである。

マルクスはこの言葉を笑い物にすることを好んだ――彼はリ

ヒノフスキー侯が一八四八年のドイツ国民議会でのポーランド討論に際して行った演説を『資本論』（普及版、五二七ページ）でも引用している。

「歴史的権利はいかなる日付も持っていない（笑い）。歴史的権利に対しては、より大きな権利が以前の日付に従って返還を要求できるようないかなる日付もない」。

『新ライン新聞』は、保守的なプロイセン・ユンカーのこのような言葉を嘲笑した。その第一の理由は「高貴な騎士がドイツ語を話さず、プロイセン語を話している」からであり、第二の理由は次のことである。

「リヒノフスキーが、高貴なドン・カルロスの円卓において功名をたてるためのあの歴史的権利を闘い取ることができる以前に、青ざめた財政窮乏の恐怖がプロイセン騎士階級を、絶えざる崩壊をもって脅かすにちがいない」。

これら全ては大層奇妙なことであったが、いずれにせよ我々は歴史的権利がいつ始まり、いつ終わったかという日付を確認することはできないという事実は否定できない。もし今日すべての歴史的権利を有効なものにしようとすれば、果てしなき混乱に落ち込むことになるであろう。誰もまたそれを望んではいない。個々の場合にのみ歴史的権利を貫徹させることは、単なる恣意にすぎない。

事態を回転させて、古い権利状態の復旧について語る代わりに、犯された不正の補償について語ったとしても、事態は少しもよくならないであろう。それに対しては、「一定の日付」がないわけではない。しかし、犯された不正とは一体何か。征服か。しかし、現在の国境だけでなく、以前の国境もまたおおむね征服に基づくものである。どのような日付から、不正が権利となるのか。フランス人はドイツによるエルザスの征服を不正とみなすが、ドイツ人はそれ以前の一七世紀と一八世紀のフランスによる併合を不正とみなす。

民主主義的見地からのみ、征服は不正、すなわち民主主義の命令に対する違反となる――住民がその意志に反して、外国に編入させられるというような場合に。このような場合に、決定的なものとみなされるのは、住民の意志であり、歴史的に伝えられた所有関係ではない。このような見地から見れば、住民の意志が併合に抗議しており、併合がただ暴力的にのみ維持されているかぎり、勿論不正は不正にとどまる。それに反して、問題となっている地域の住民の、彼らが以前に所属していた国家への帰還は、もし住民大衆が新しい状況に馴染んでおり、その強制的な変更によって追い立てられ、圧迫されたと感ずるならば、不正になるであろう。

それゆえ、この場合にもまた、我々は国際社会民主主義者として、当該住民の自由な投票によって承認された場合にのみ、国境変更に同意することができる。いつでも、どんな状況の下でも、外交においても内政においても、人民の意志が我々が服従すべき最高の権威である。勿論、このことは我々の科学的信

念とか、我々が熱望し、そのために尽力している目標とかには当てはまらない。こうした問題では、我々は人民投票によっては指図されない。我々は、人民もまた政府に劣らず過ちを犯すものであり、その階級構成、情報、歴史的諸条件によって、その多数が場合によってはきわめて反動的になりうるということを知っている。

しかし、我々は労働者階級の解放は、労働者階級自身の仕事でなければならないということ、そして、労働者階級は、彼らが人民の多数をなし、人民の多数が国家政策を決定する所でのみ解放されるということを知っている。さらに、プロレタリアートの啓蒙と組織化、ならびに国家権力の獲得と合目的的な行使に向けてのその能力の発展は――他の諸条件が同じであれば――民主主義的な状態の下で最も豊かに可能となるということも知っている。

したがって、プロレタリアートの党は、いかなる状態の下にあっても、あらゆる点で民主主義的な党でなければならない。この党が民主主義からはずれる時には、プロレタリアの解放闘争は重大な損害をこうむることになる。このことは、外交政策にも内政政策にも同様に当てはまる。それゆえ、この党は場合によっては、単に合目的性という理由からだけでなく、原則的にあらゆる征服政策を拒否しなくてはならない。そして、自分たちが拒否した戦争が国境変更をもたらす所では、当該住民が望んでいるか、少なくとも暴行とは感じられないような変更のみを認めるべきである。

原注

（1）H. Cunow, Parteizusammenbruch. Berlin 1915, Verlag Vorwärts, S. 36.